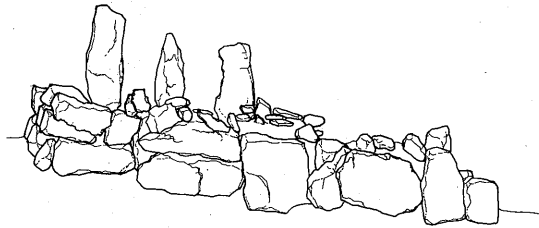


宝満山遺跡群 II

北谷ダム建設に係わる調査報告

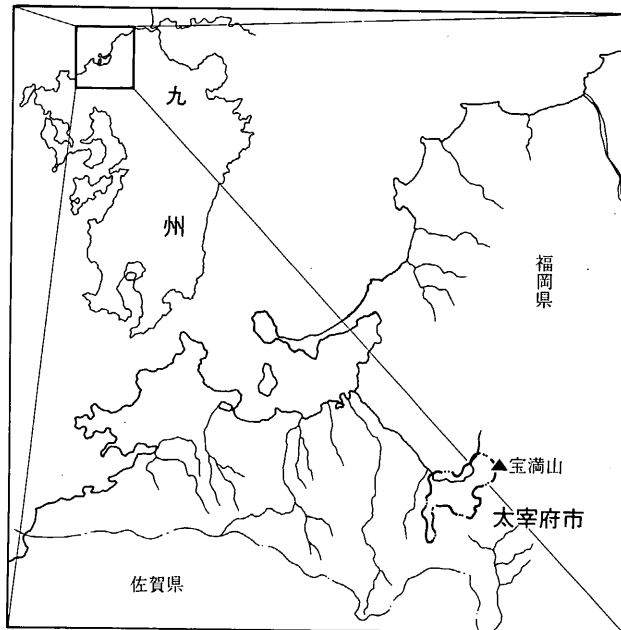


1997

太宰府市教育委員会

宝満山遺跡群 II

—第14・16・18次調査—



平成8年度

太宰府市教育委員会

序

太宰府市では貴重文化遺産を次世代へ継承してゆくことを念頭に日々努力いたしているところでございます。

今回報告いたします宝満山遺跡群は、北谷ダム建設に伴って埋蔵文化財包蔵地域内でおこなった緊急調査であります。

宝満山は中世以来、修験道の霊峰として知られ、今では多くのハイカーが訪れる森林浴や登山の山として親しまれております。

今回の調査では急峻な尾根やそれに続く谷部を利用した北谷地区における遺跡の様相の一端が明らかにされ、宝満山の古代から中世にかけての歴史のページに新たな項目を増やすこととなりました。

本報告が宝満山の研究の一助として、また広く文化遺産の保存と啓発に活用していただければ幸いに存じます。

最後になりましたが調査及び整理に参加されました作業員の皆様、調査にご理解ご協力いただきました福岡県北谷・五ヶ山ダム建設事務所に対し厚く御礼申し上げます。

太宰府市教育委員会
教育長 長野 治己

例 言

1. 本書は平成5年度から平成7年度までに太宰府市教育委員会が調査した宝満山遺跡群内の北谷ダム建設に伴う発掘調査に関する発掘調査の成果をまとめたものである。
2. 本書に掲載した調査は、第14次（平成5年度）、第16次（A,B,C区、平成6年度）、第18次（A,B区、平成7年度）の3次6地点の緊急調査である。
3. 本書に掲載した発掘調査の原因、期間、面積、担当者などは各調査の報告部分に記載している。
4. 遺構の実測は各調査担当者のほか谷由紀子、柴田剛（現筑後市教育委員会）がおこなった。写真撮影は山村信榮が、調査区全景の空中写真は（有）空中写真企画がおこなった。また第16・18次調査の遺構全体図は、写真測量による機械素図作成をアジア航測株式会社に委託した。
5. 遺構の実測には国土調査法第II座標系を利用した。したがって本書に示される方位は特に注記のない限りG.N.（座標北）を示している。
6. 遺物の実測は山村の他、森田レイ子、山本麻里子、松隈里恵子、相川寿美子、鶴味加代子がおこない調査担当者が検査の上必要部分を補足した。また遺物写真撮影は山村がおこなった。
7. 図版の浄書は主として山村、上村英士がおこなった。
8. 本書の執筆編集は山村がおこなった。
9. 本書に使用した図、写真、遺物については一括して太宰府市教育委員会が太宰府市文化ふれあい館で収蔵、管理している。

目次

I. 宝満山遺跡群の調査の概要	1
II. 調査組織	5
III. 調査の概要	
(1) 第14次調査	1 1
(2) 第16次調査A区	1 4
(3) 第16次調査B区	2 7
(4) 第16次調査C区	3 3
(5) 第18次調査	4 3
IV. 総括	4 7
V. 資料	
宝満16次調査の道路状遺構の硬化現象に関する自然科学分析について	4 8

I. 宝満山遺跡群の調査の概要

遺跡の歴史的環境

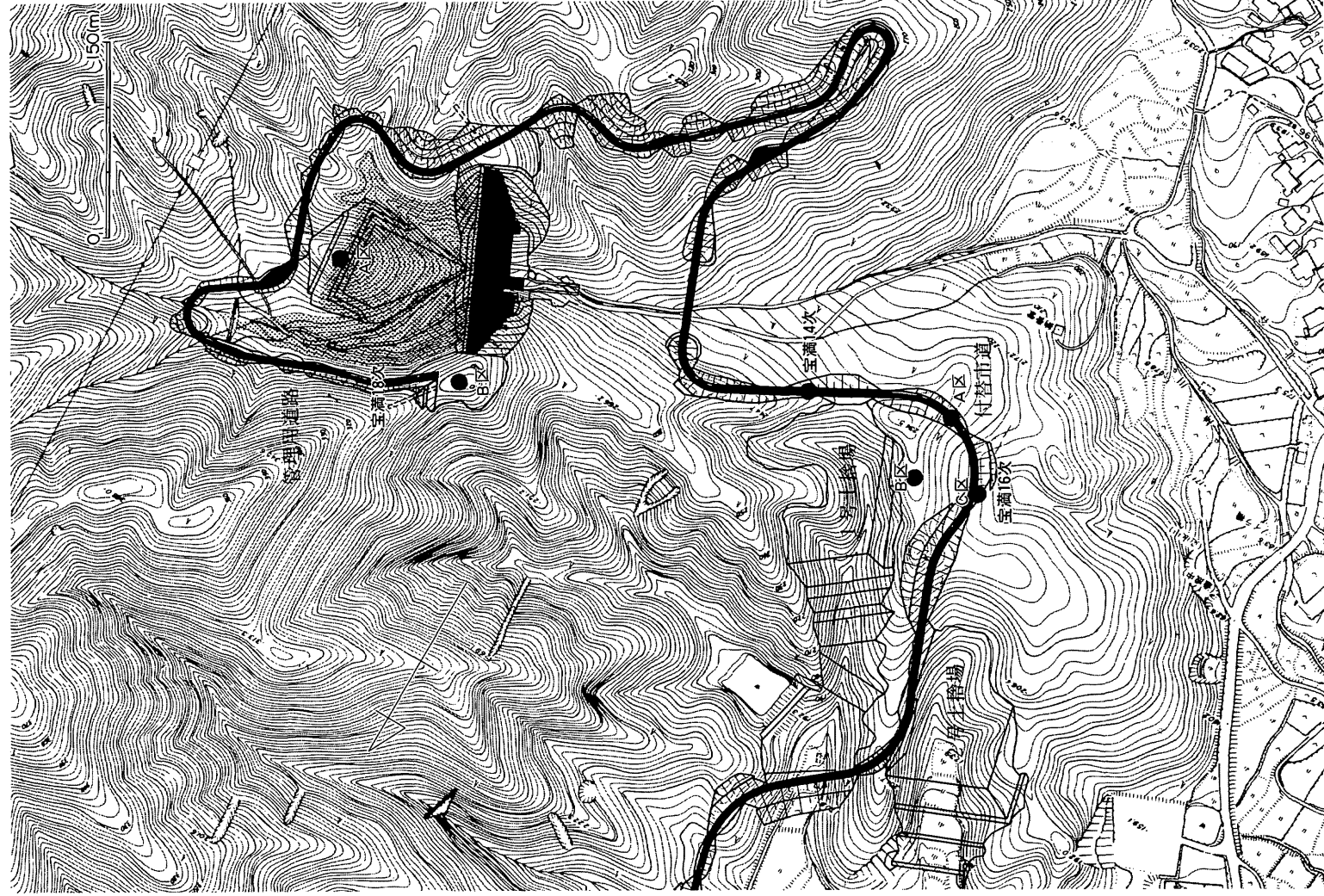
宝満山（別称は竈門山）は太宰府市の北東にそびえる標高829.6mの山であり、頂はさらに北東へ頭巾山、三郡山、砥石山、若杉山へと連なり筑前の主峰の一角をなしている。太宰府市は玄界灘に連なる博多湾に面した福岡平野と、有明海に面した筑後平野を溝状に繋ぐ結節点にあたり、古代には九州を総監する国の役所「大宰府」が設置された場所である。宝満山ではこの大宰府が活発に活動を始めた8世紀前半頃から山頂を中心とする山中で土器を用いた祭祀が始まり、8世紀後半には蕃客や蕃神などを示す「蕃」銘の墨書土器に見られるよう国家的国境祭祀を示唆する遺物が出土するに至っている。延喜式に記載のある竈門神社は山頂の花崗岩の巨石を依代とするもので、出土遺物から奈良時代に引き続き平安時代以降、近世に至るまで何らかの形で山頂祭祀が継続されていたことがわかる。山頂を上宮とし、中腹に中宮、山裾の内山地区に下宮が営まれ、外宮には奈良時代創建で平安期に再建されたと推定される七間五間の礎石建の総柱建物があり、それを中心に平安期から中世にかけての坊跡と考えられる遺構が広がっている。坊跡は内山地区（下宮地区）のさらに北側に南谷地区、北谷地区が存在し、多くの輸入陶磁器を中心とする遺物が古くから採集されている。

平安期前半には入唐僧が渡唐前後に参籠し、中でも最澄の帰国後の宝塔建設を契機として延暦寺の勢力が台頭し、竈門神社の神宮寺としての竈門山寺の活動が活発化し、平安末期には他寺院や大宰府政庁府との間で軋轢を生じるにまで至ったらしい。修験の場としての位置づけも明確化し密教法具と考えられる遺物も出土している。寺院は中世には有智山寺、大山寺などと称され、「大山寺神人」と称する寺に係わる商人が主人公となり港湾都市博多を拠点に貿易活動で富を重ねたとされている。中世に於いては山の西麓にはあまたの坊と称す生活空間があり、近世地誌「筑前国続風土記」（1710年貝原益軒著）には「有智山、南谷、北谷、三所の僧舎すへて三百七十坊有しとかや。此内三百坊は衆徒方とて、専経説を学ぶ。七十坊は行者方とて、専戒行をつとめて、入峰を事とす。今もむかしの僧坊の跡、三所にのこりて昭々たり。」と記されている。これら近世の初頭まで明確に残されていた坊跡は後の耕作地化、宅地化によって不鮮明となり、現在に至っている。内山地区（下宮地区）のみで発掘調査によって坊の一角が明らかにされつつあるのは既述のとおりである（第5図）。近世の坊跡は山頂付近を中心とする筑紫野市域まで広がっている。

今回の調査は中世遺物の散布する遺跡の北限のさらに北側でおこなった初めての発掘調査であり、北谷地区における今後の指針ともなる重要な調査であった（第6図）。

参考文献

小田富士雄「宝満山の地宝-宝満山の遺跡と遺物」1977太宰府天満宮文化研究所



第1図 太宰府市北谷ダムの事業概要

小田富士雄・武末純一「太宰府・宝満山の初期祭祀」1983財団法人太宰府顕彰会
 小西信二「宝満山及び竈門神社周辺の遺跡分布調査報告書」1984財団法人太宰府顕彰会
 狭川真一「宝満山遺跡」1989太宰府市教育委員会
 「太宰府市史考古資料編」1992太宰府市史編纂委員会
 山村信榮・松川博一「大大宰府展」1997太宰府市文化ふれあい館



北谷ダム定礎式で地入れされた礎石の据え付け作業をする企業体関係員

**太宰府市の新たな水源
北谷ダム定礎式
11年3月の完成目指す**

県太宰府市北谷地区に建設される北谷ダムの定礎式が5日、県立北谷の式典で厳格な儀式が行われ、同日、同日に水源地の確保が完了した。このダムは、北谷地区の水源確保に大きく貢献する。このダムは、北谷地区の水源確保に大きく貢献する。このダムは、北谷地区の水源確保に大きく貢献する。

調査に至る経緯

福岡県と太宰府市では近年の慢性的な渇水状況に対処するため、水源地の確保に向け調査をおこない、御笠川水系にそれを求め、上水道の水利と洪水調節機能を合わせ持つ県内初の「小規模生活ダム」を本市の大字北谷の宝満山裾の山の神川に建設するに至った。

ダムは重量式コンクリートダム型式で、堤高は39m、堤頂長は145m、貯水池は集水面積が0.48平方キロ、湛水面積は0.02平方キロ、有効貯水量は23万1千トンである(第1図)。

発掘調査に係わる協議と契約は福岡県北谷・五ヶ山ダム建設事務所と太宰府市教育委員会文化課がおこない、事前の踏査を基に必要箇所について立会、発掘調査を各年度事業工区ごとにおこなう形となった。

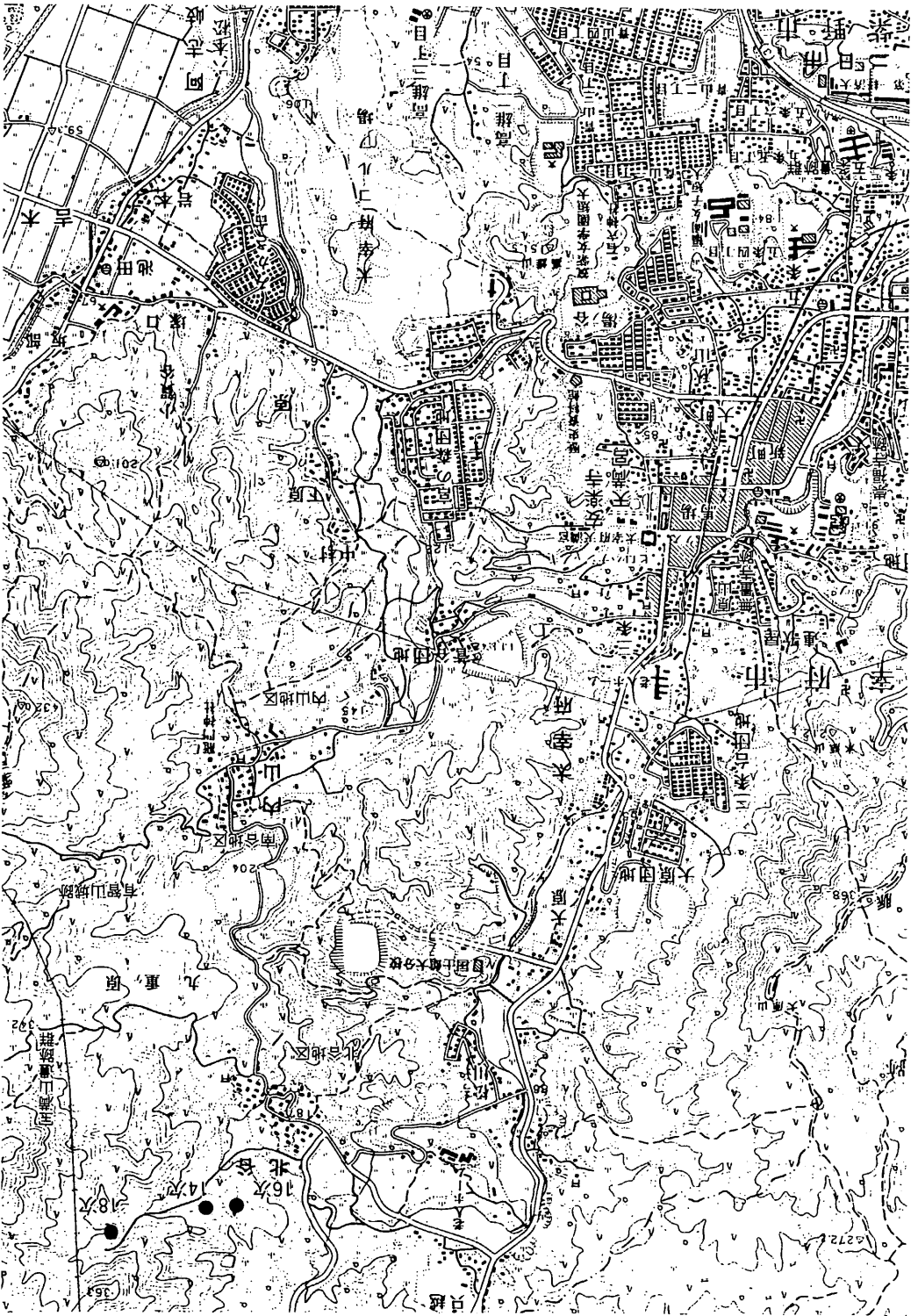
第2図 ダム定礎式新聞記事

調査・整理の方法

発掘調査区は大半が杉、桧を主体とする人工林の中にあり、事前に試掘調査を実施することができなかった。遺構の検出には工事に伴う立木の伐採終了後に大半が重機を用いて表土を除去し、人的な石組みが認められる箇所については人力で鍬を用いて表土剥ぎをおこなった。

遺構の検出時にはS-1からはじまる仮の遺構番号を付与し、遺構実測、写真撮影、遺物取り上げをし、付与した仮番号については今回の整理作業時点で、例えば「宝満16次調査S-1」という土坑状遺構の場合、「宝16SK001」と変換表記している。遺構実測は個別遺構は基本的に1/20ないし1/10で手測りで実測した図を原寸コピーし1/40に縮小したものである。全体図は航空測量によって作成した1/200の図を適宜縮小している。14次調査分については1/200の平板測量図をベースとし、それを航空測量による1/500の図に貼り込んだものをトレースしている。

第3図 至清山遺跡群位置図 (1/25,000)



今回使用している国土座標の数値、ならびに標高レベル値はすべて、各現場周辺でダム工事に先立って設定された工事用の杭のデータから測量し導き出したものである。

遺物については取り上げ後に水洗し、乾燥、注記（墨による出土地点の書き込み）、仮復元の後、実測、取拓し接合石膏復元、彩色し写真撮影をおこない収納している。なお、複数地点で出土した遺物が接合する場合、層的にはより下位の古い層で、層位と遺構出土のものが接合した場合、性格が明確な遺構出土のものに帰属させて報告をおこなっている。製図については作成した原図の原寸コピーをトレースし1/3に縮小したものである。

本文中で使用される土器の型式の表記は一貫して本市が使用している分類基準に基づいて表記されている。

基本的な本市における調査・整理の流れや分類基準に関する参考文献については以下の文献をご参照いただきたい。

「太宰府・佐野地区遺跡群I」1989太宰府市教育委員会

II. 調査組織

報告する調査が多年度にまたがるため、ここで一括して調査体制を列挙する。

（平成5／1993年度）宝満14次調査

総括	教育長	長野治己
庶務	教育部長	中川シゲ子
	文化課長	佐藤恭宏
	埋蔵文化財係長	高田克二
	文化振興係長	大田重信
	主任主事	岡部大治
		川谷 豊
調査	技術主査	山本信夫（5年10月1日～）
	主任技師	山本信夫（～5年9月30日）
		狭川真一
		城戸康利
		緒方俊輔
		山村信榮（調査担当）
		中島恒次郎

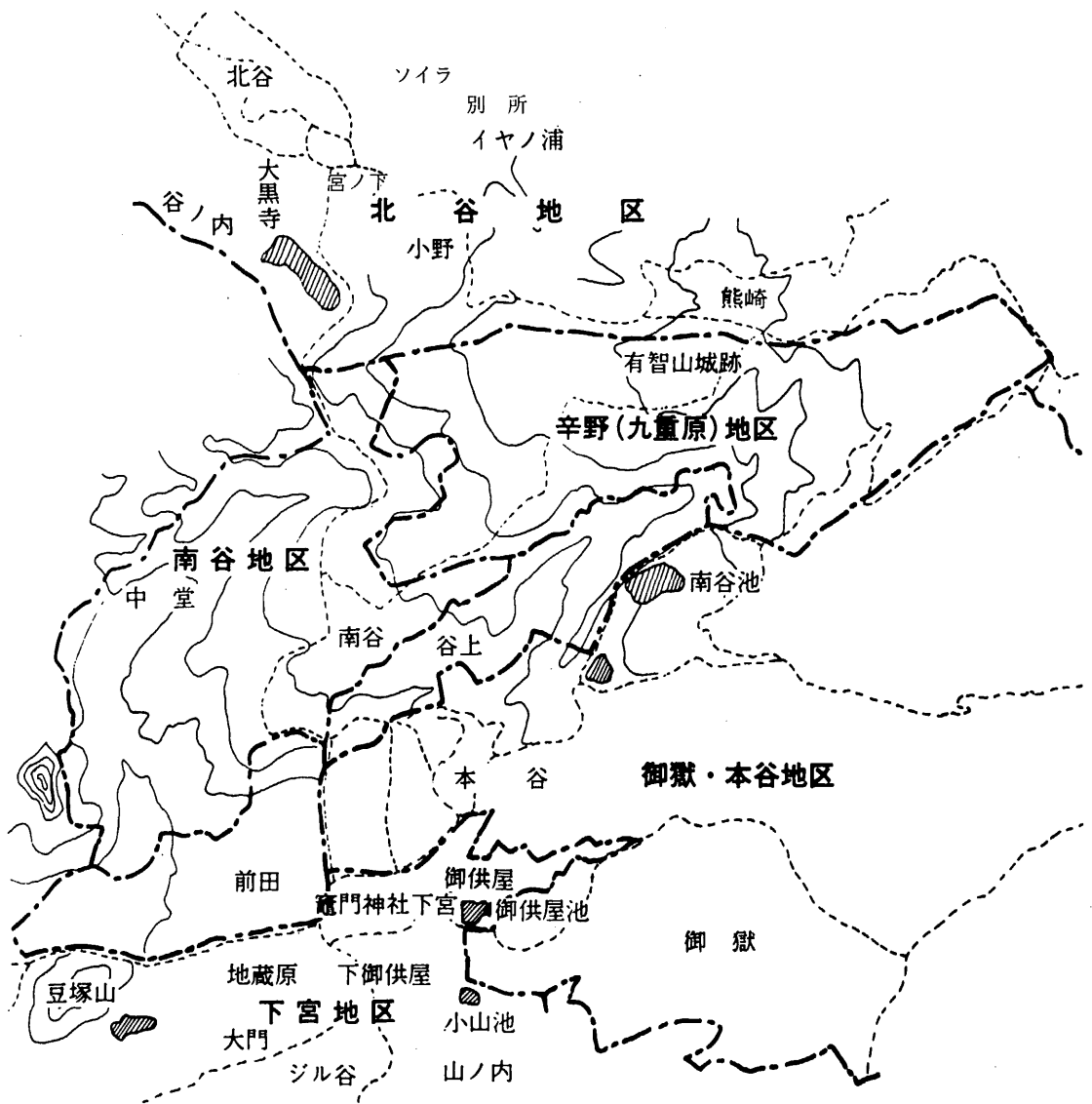
技 師 塩地潤一
 技師（囑託） 田中克子
 重松麻里子（調査担当、5年6月1日～）
 井上信正（5年7月1日～）

（平成6／1994年度）宝満16次調査

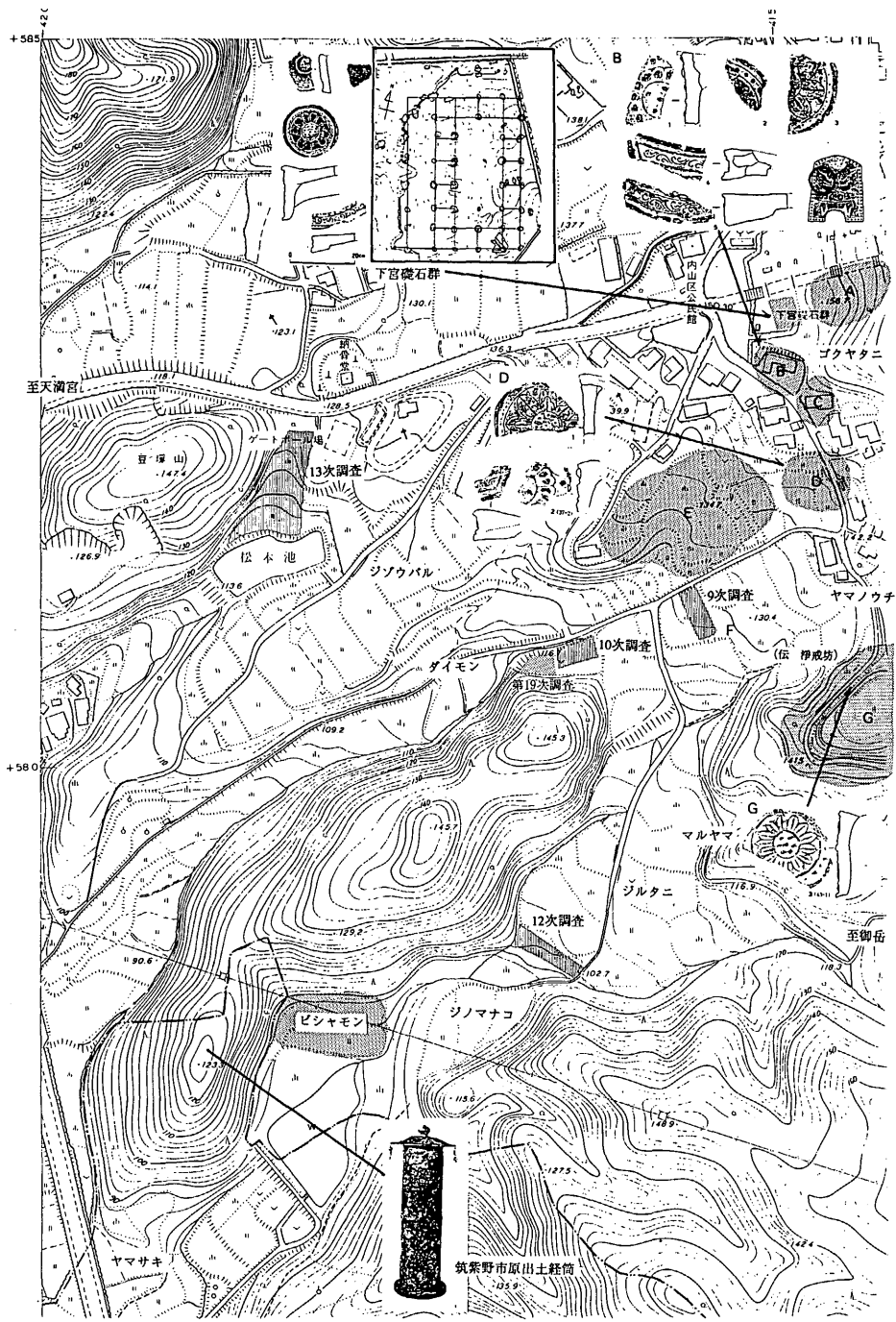
総括 教育長 長野治己
 庶務 教育部長 白木三男
 文化課長 花田勝彦
 文化財保護係長 高田克二
 文化振興係長 大田重信
 主任主事 岡部大治 川谷 豊
 主 事 今村江利子
 調査 技術主査 山本信夫
 主任技師 狭川真一 城戸康利 山村信榮（調査担当）
 中島恒次郎 重松麻里子
 技 師 井上信正

（平成7／1995年度）宝満18次調査

総括 教育長 長野治己
 庶務 教育部長 白木三男
 文化課長 花田勝彦
 文化財保護係長 和田敏信
 文化振興係長 大田重信
 主任主事 岡部大治 川谷 豊
 主 事 今村江利子
 調査 技術主査 山本信夫
 主任技師 狭川真一 城戸康利 山村信榮（調査担当）
 中島恒次郎
 技 師 井上信正 高橋学
 技師（囑託） 下川可容子（保存処理）松川博一



第4図 宝満山西側地域概念図



第5図 宝満山遺跡群内山（下宮）地区全体図（1/5,000）

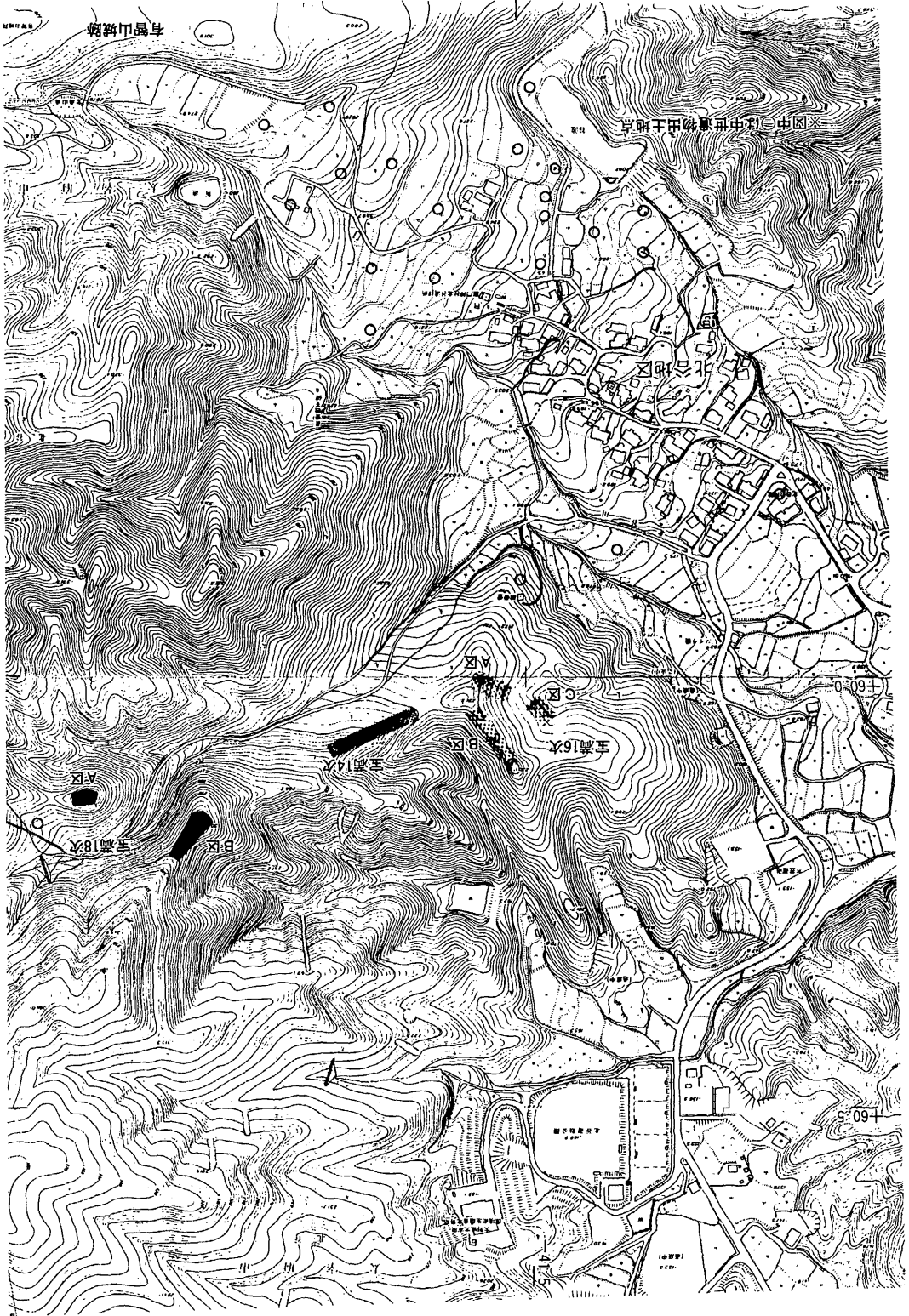
(平成8/1996年度) 整理

総括	教育長	長野治己
庶務	教育部長	小田勝弥
文化課長	津田秀司	
	文化財保護係長	和田敏信
	文化振興係長	大田重信 (～8年6月30日)
		田中利男 (8年7月1日～)
	主任主事	岡部大治 川谷 豊
	主 事	今村江利子
調査	技術主査	山本信夫
	主任技師	狭川真一 城戸康利 山村信榮 (整理担当)
		中島恒次郎 井上信正
	技 師	高橋 学 宮崎亮一
	技師 (嘱託)	下川可容子 森田レイ子 (整理担当)

また、このほか工事関係者をはじめとする多くの方々のご協力とご教示をいただき調査をおこなうことができました。記して感謝申し上げます。

小田富士雄、武末純一 (福岡大学)、西谷正 (九州大学)、唐木田芳文、高倉洋彰 (西南学院大学)、大隈悟 (九州産業高校)、小西信二 (太宰府天満宮)、池辺元明、秦憲二 (福岡県教育委員会) 平田定明 (春日市教育委員会) (以上敬称略す)

第6図 玉清山遺跡群調査現場位置図



III. 調査の概要

(1) 第14次調査

調査地は、太宰府市大字北谷字熊崎639番地に所在する。調査は平成5（1993）年12月17日から12月28日まで実施した。調査面積は1,040m²で、調査は山村信榮、重松（現山本）麻里子が担当した。なお測量及び平板実測にあたっては谷、柴田の協力を得た。

1. 遺構検出状況

調査区は東西に延びる尾根線上にあり、高位の東側では背の中央に花崗岩の角礫の崩壊露頭があった。遺構の検出環境は全体に浸食局面であり表土である腐植土を除去した時点で大半の遺構プランは認識された。検出した遺構の一部では堆積土が地山ごと流出し、残存状況の良くないものであった。遺物については本地点では一件も採取されなかった。

2. 遺構

(1) 土坑（第8図、Pla.3）

14SK002 南北0.68m、東西0.62m、深さ約0.14mを測る。14SK003に近接する。斑状に被熱によると思われる地山土の赤変が見られる。1層には炭塊が堆積する。

14SK003 南北0.9m、東西0.8m、深さ約0.13mを測る。14SK002に近接する。赤変箇所は遺構の側面と底に張り付いたように分布する。底は赤変の厚さが1cmほどある。1層には炭化物が少量堆積する。

14SK004 南北1.2m、東西1.1m、深さ約0.4mを測る。斑状に被熱によると思われる地山土の赤変が壁面に見られる。すべての層に炭が混入する。

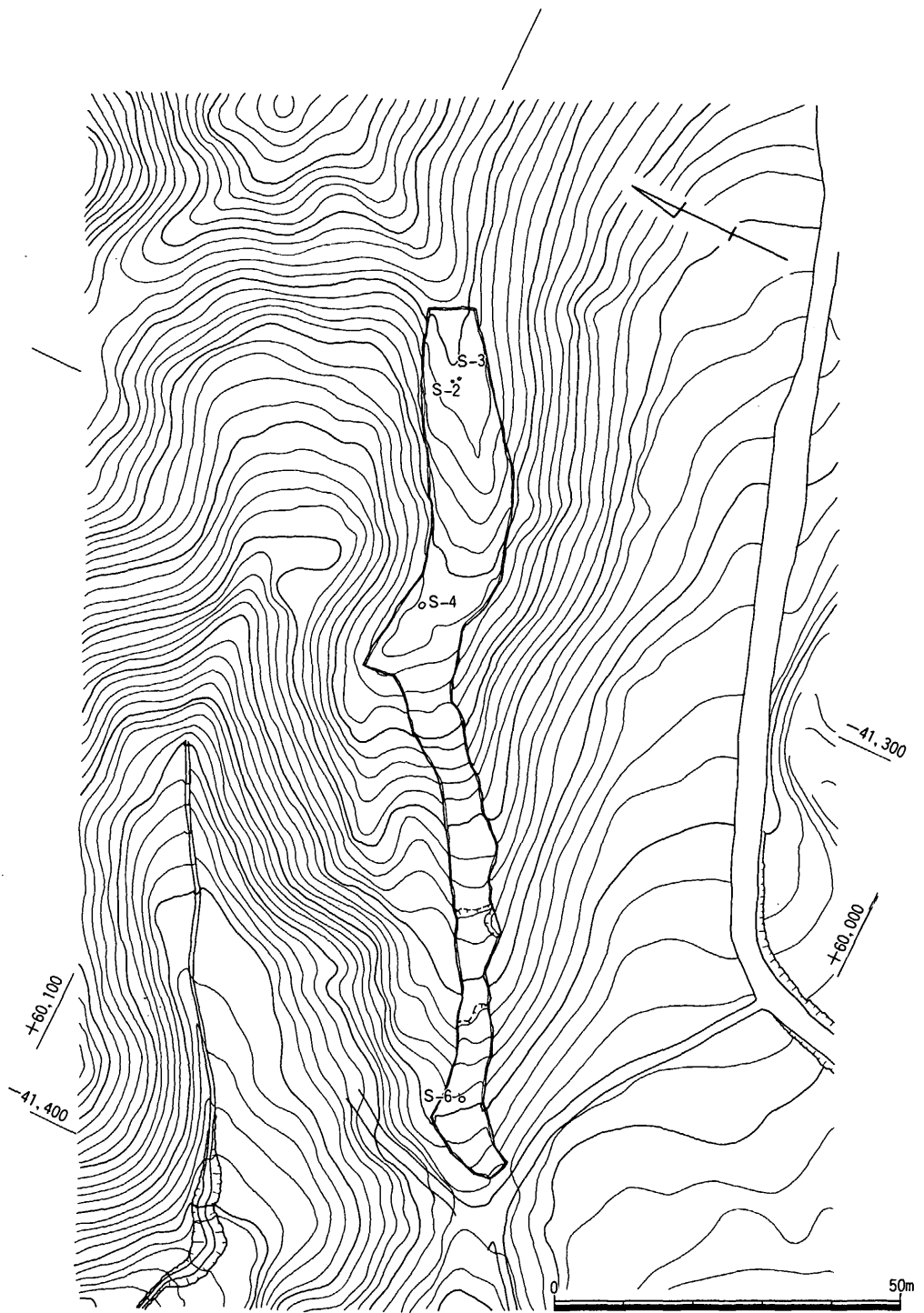
14SK006 南北0.9m、東西0.9m、深さ約0.2mを測る。壁面の一部に被熱によると思われる地山土の赤変が見られる。1層には炭塊が若干混入する。

3. 遺物

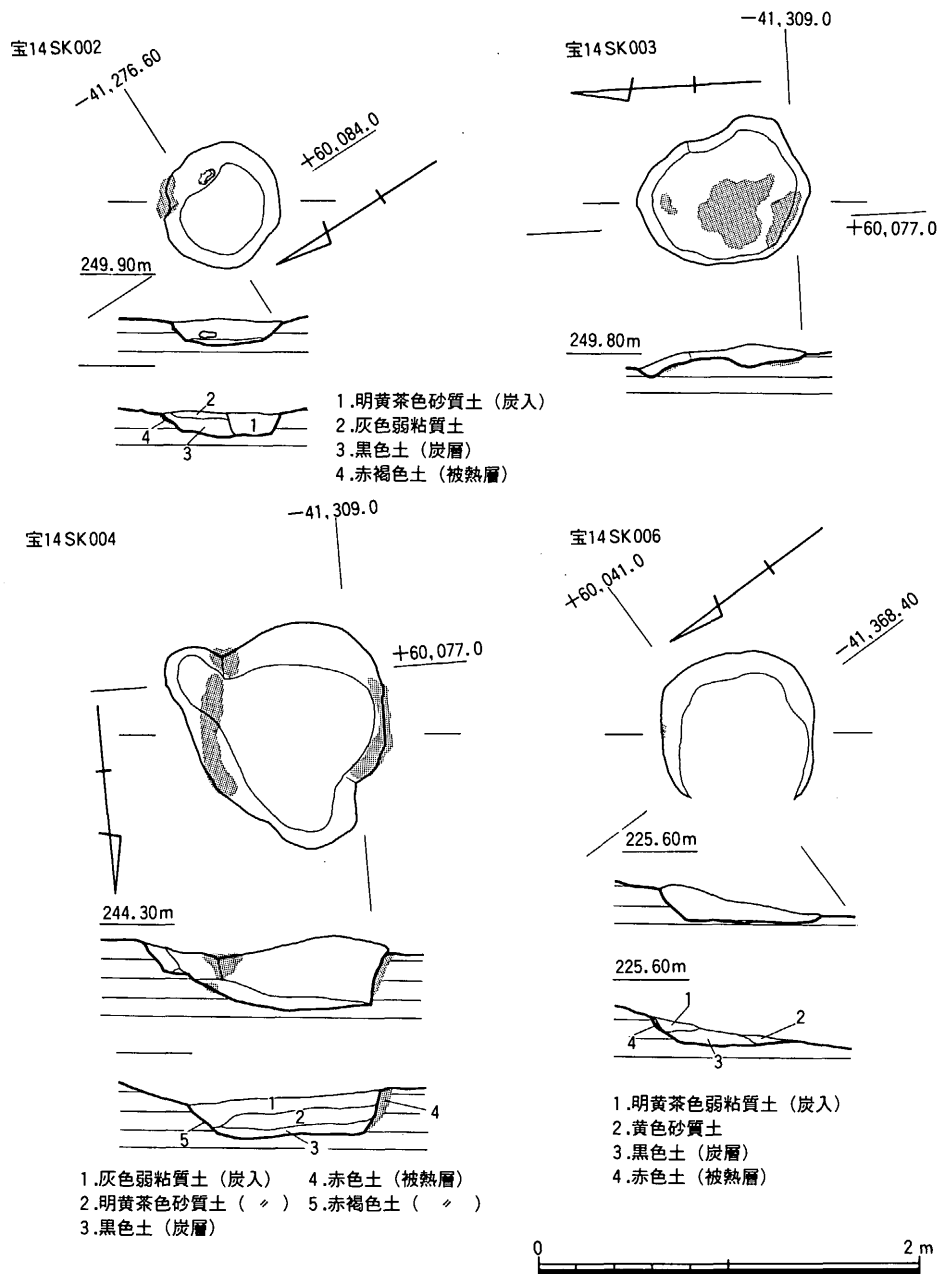
遺物については本地点では一件も採取されなかった。

4. 小結

出土遺物が皆無であり、遺構の性格を論じるにはかなり難があるが、この調査で検出されたのはすべていわゆる「焼土坑」と称される焼成土坑である。時期的には同様の遺構としては後述する16次調査のB地点では平安時代後期の土器が出土し、C区では平安時代後半期の、また、



第7図 宝満14次調査区全体図



第8図 宝満14次遺構実測図 (1/40)

18次調査では下限が鎌倉後半期頃かと考えられており、本事例もその時期に相応する可能性は高い。

性格については、流出があるとはいえ全体に浅い作りであり、底まで赤変するものがあることから、一般的に言われる炭焼き (伏せ焼き) 遺構の可能性もあるのではなかろうか。16次調査のA地点との関連を考慮すれば遺体焼成施設の可能性も残される。

(2) 第16次調査

調査地は、太宰府市大字北谷字熊崎に所在する。調査は平成6（1994）年5月18日から7月9日まで実施した。調査面積は3540m²で、調査は山村信榮が担当した。

なお、全体図の作成は航空測量写真図化によった。

調査は試掘の結果三カ所に分けておこない（第6図）、丘陵頂部をA区、尾根線上をB区、谷部をC区として調査区を設定し、工事の進捗に合わすかたちで多少各地区の行程が重複しながら調査が進行するという形となった。以下、各地区別に成果を述べる。

A区の調査（第9.10図、Pla.5）

本地区は立木のある状態での踏査の段階から、変成岩の円礫や花崗岩の方柱状の角礫が丘陵頂部北側の緩斜面に散乱している様子が確認され、かつ、この丘陵頂部南側に近世から近代にかけて営まれた北谷区の村墓（現在は一応改葬され納骨堂が南側の山裾に建てられる）が隣接することから墳墓の存在が考えられた。腐葉土である表土は人力で除去したが、伐採木の搬出に伴う重機の作業で墓石が多少動いてしまっていた。

土層状況は腐葉土の下に灰色土があり、墓石は丘陵頂部側から供給された淡紅土によって埋没していた。地山と淡紅土の差異は微妙であり、土の堅さの差と墓石下面の検出高が一つの目安となっている。

1. 石組み遺構（墓施設）

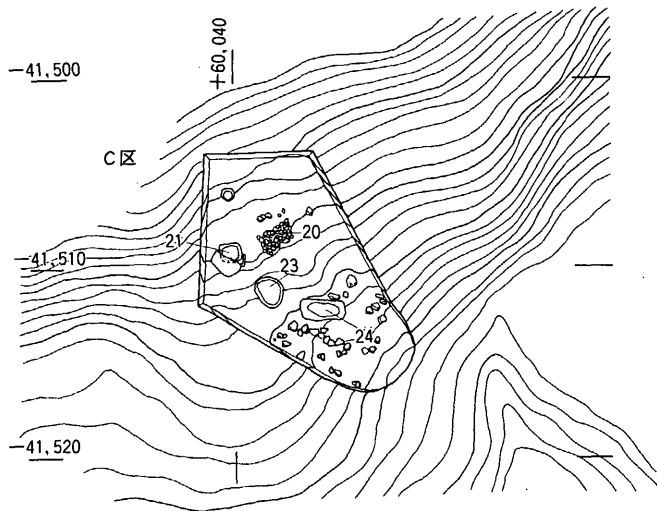
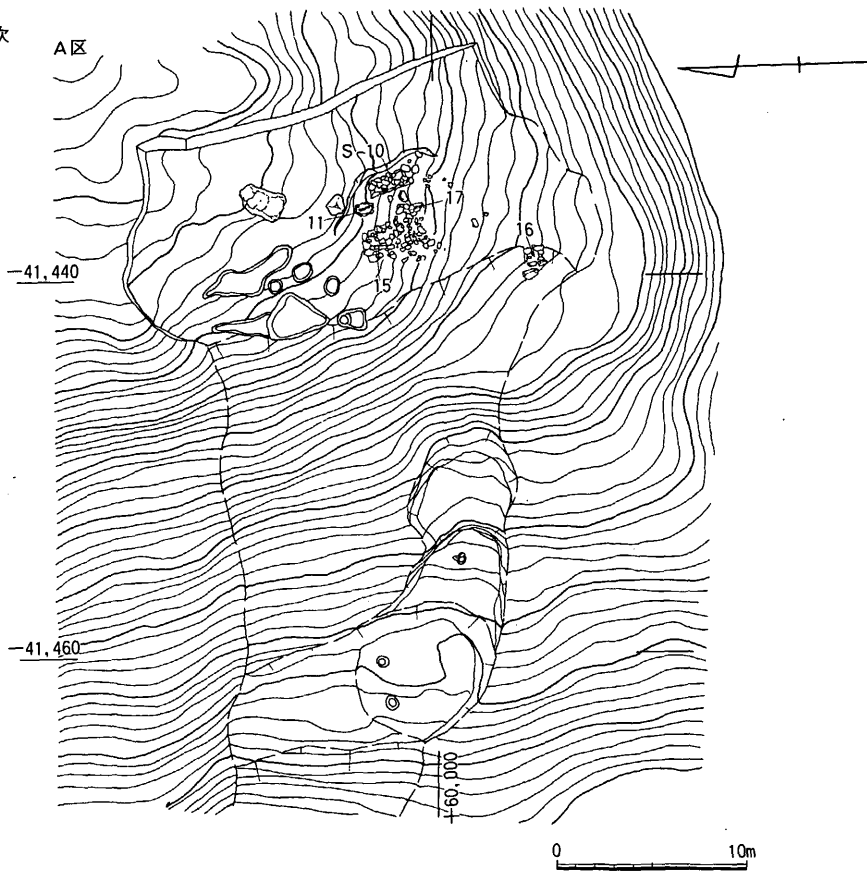
16SX010（第11図、Pla.6）

長さ2.4m、幅0.8m、基壇の高さ約0.4mを測り、平面形は長方形を呈す。長軸は正方位に対し45度ほど振れる。ベース面は北ほど高い傾斜面であり基壇自体も傾斜している。基壇は斜面の開放側（谷方向）に形状が整った石が用いられており、大きく長軸向に4つの縦目地が通る。うち北側の2列は横長い石を二段に重ねている。一番右側の列は平面プランでは多少飛び出して置かれており、内側に直交する仕切石的な石があり、このマスだけが後補のものである可能性を示唆している。北側に花崗岩の方柱状角礫の標石が3つ倒れた状態で遺存しており、窪みのある位置で建てた状態で実測、写真撮影をおこなった。石組みの中の土は石組み中に入れられた下位の層と納骨後に敷いた上位の2層とがある。プランの中央と南側のマス中の2カ所に直径約16cmほどの納骨ピットが検出された。骨は細かく細片化していた。火葬集骨であろう。

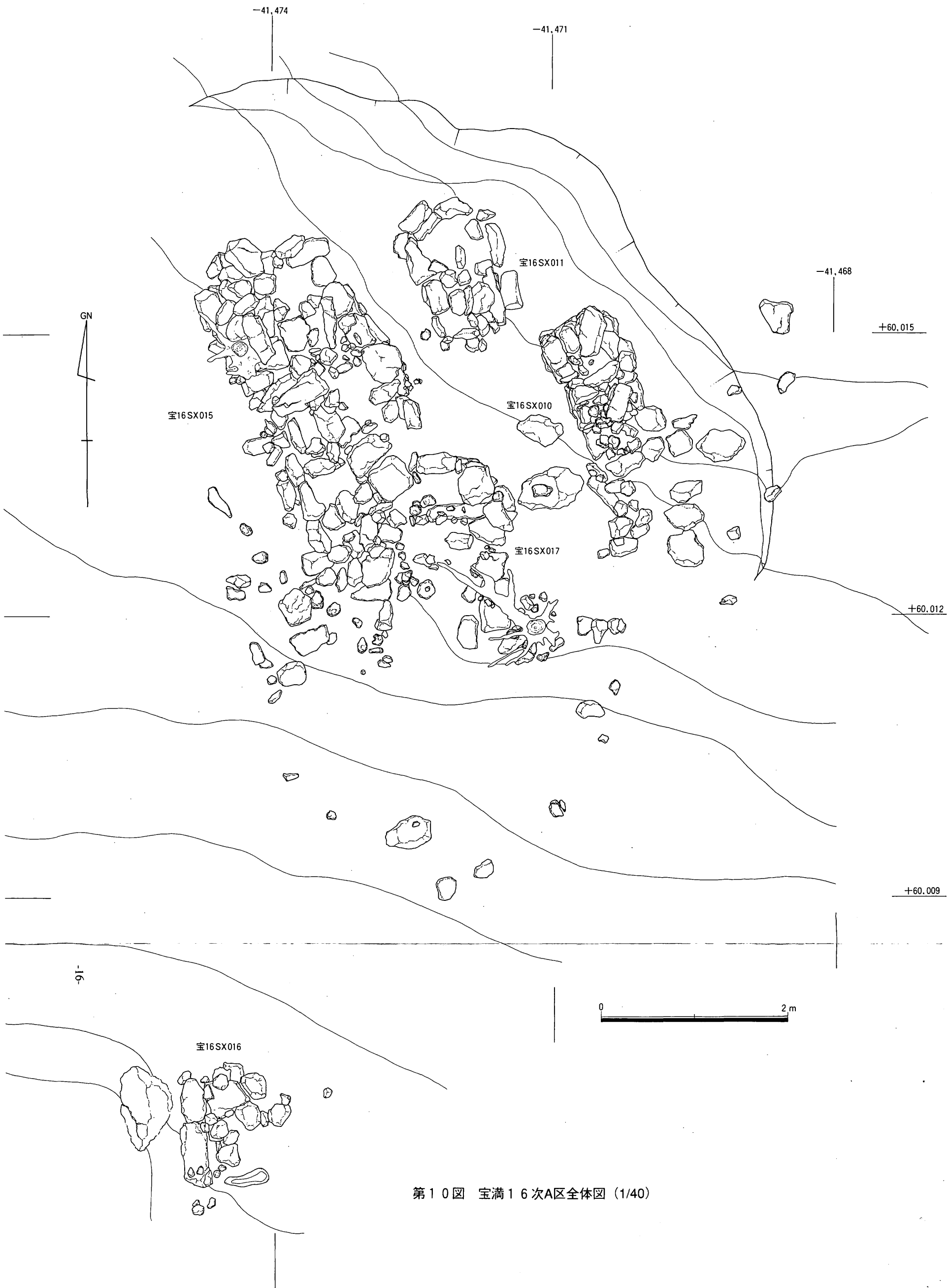
16SX011（第12図、Pla.6）

長さ1.7m、幅1.2m、基壇の高さ約0.4mを測り、平面形は長楕円形を呈す。長軸は正方位に

宝満16次

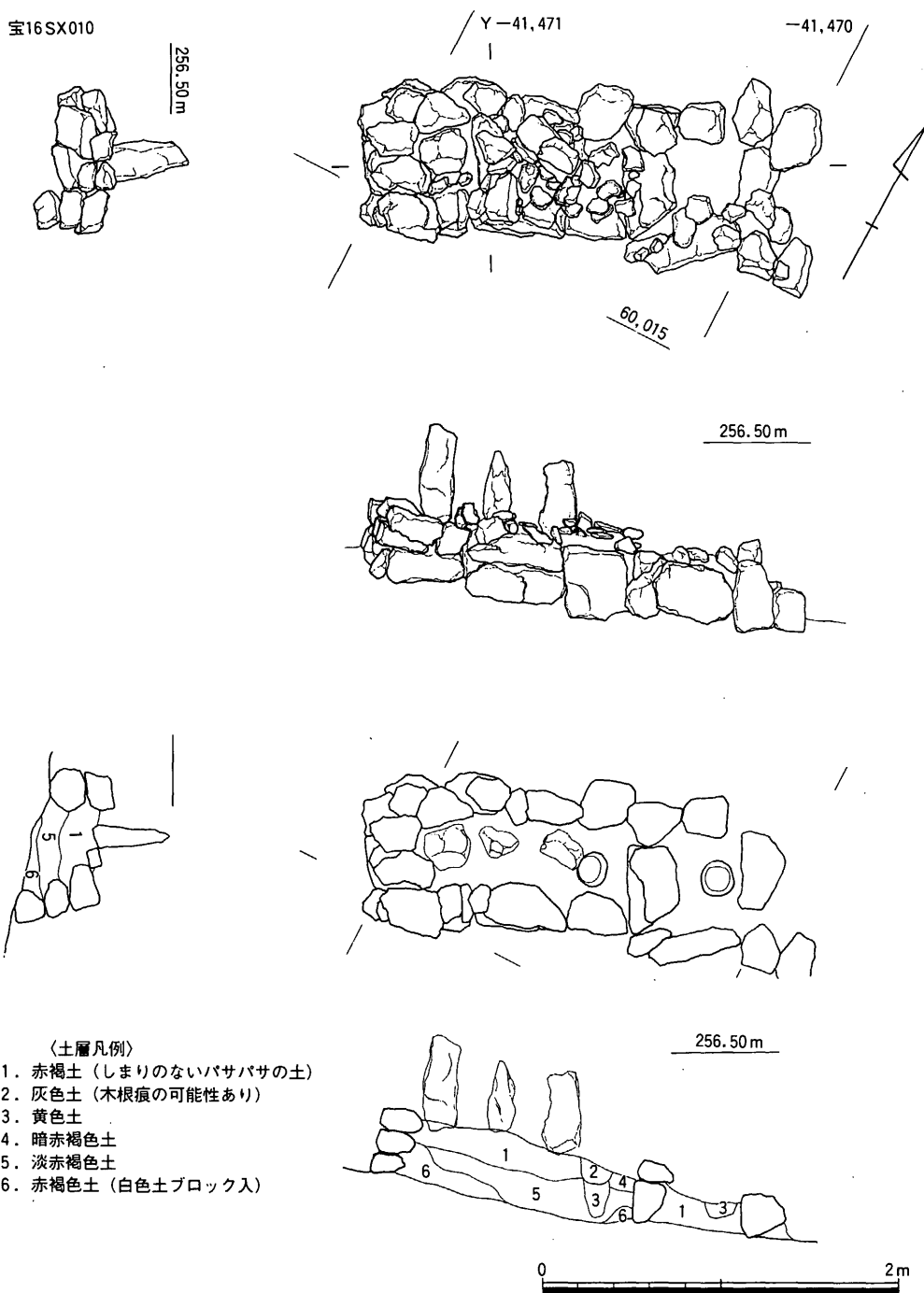


第9図 宝満16次調査区全体図1 (1/400)

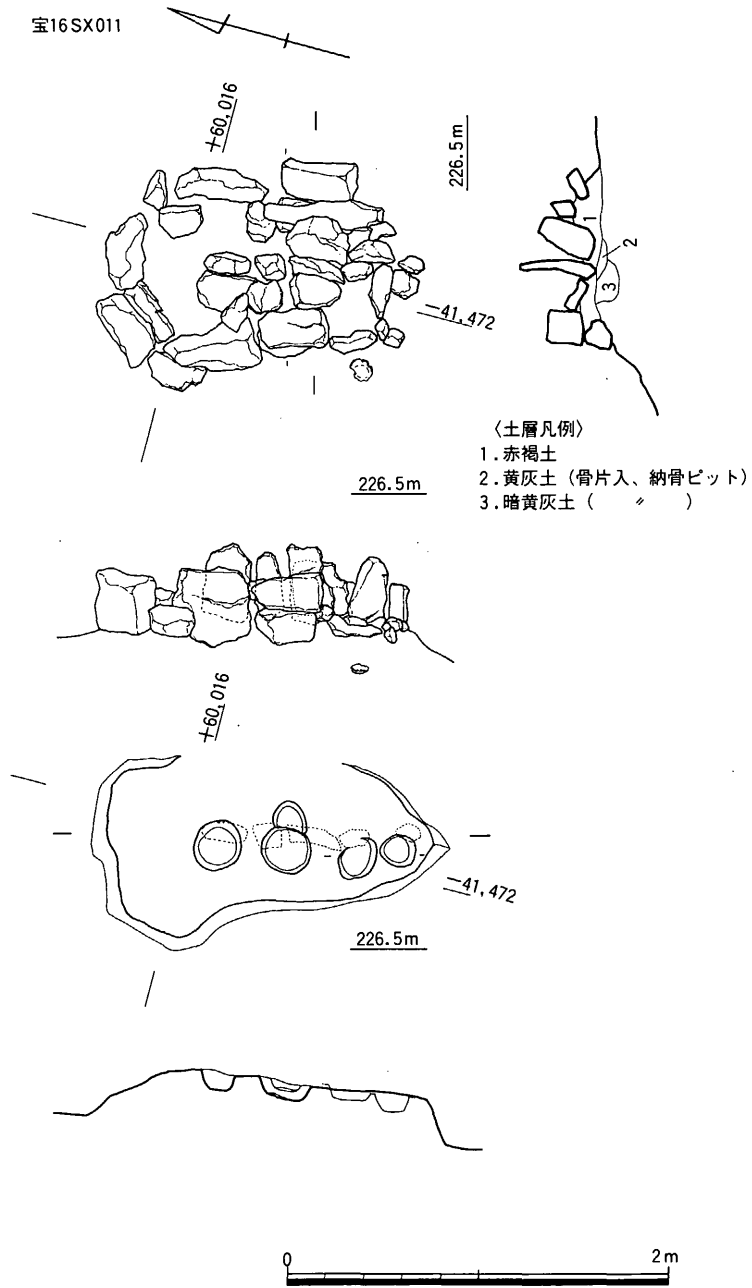


第10图 宝满16次A区全体图 (1/40)

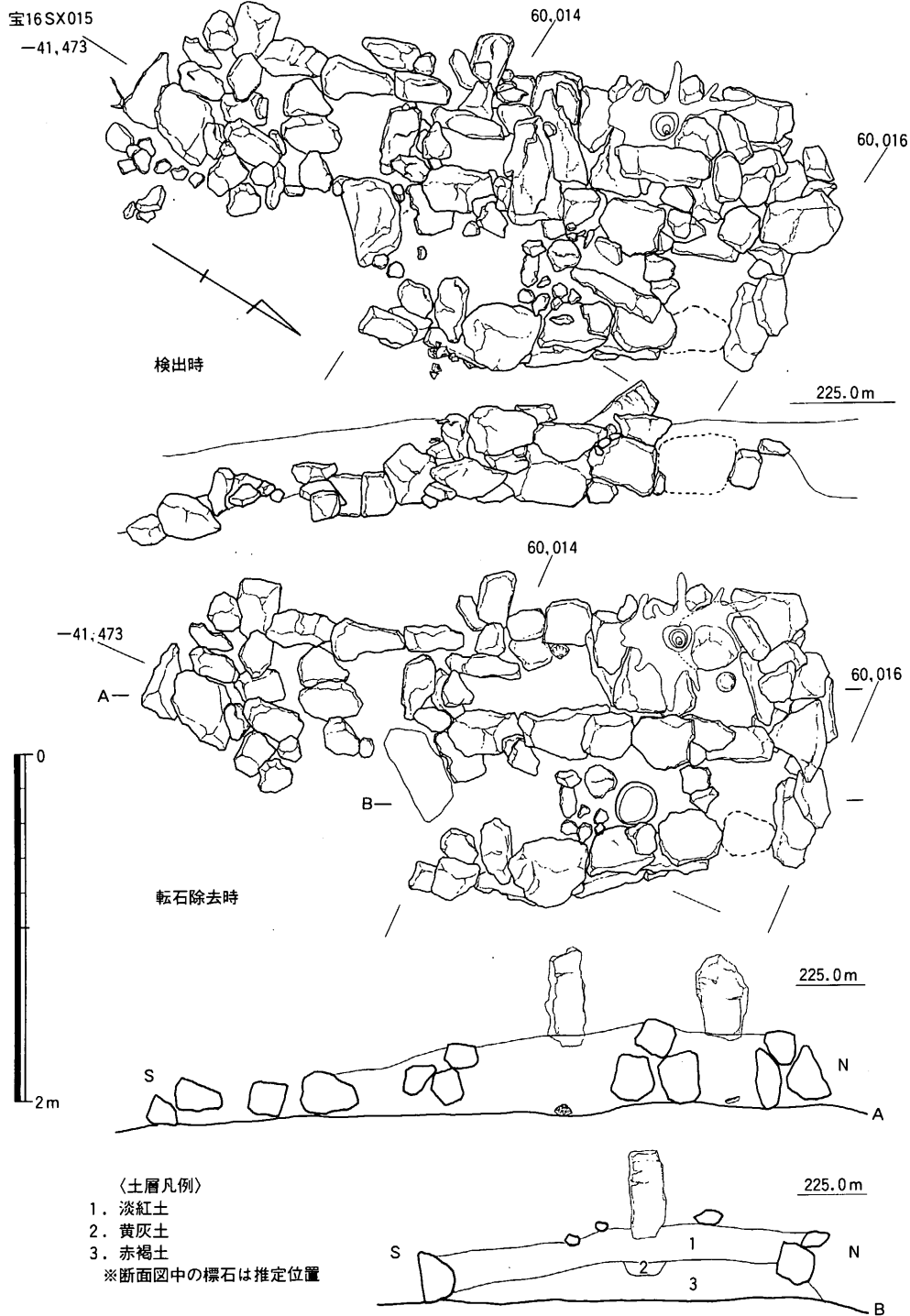
塚16SX010



第11図 宝満16次A区遺構実測図1 (1/40)

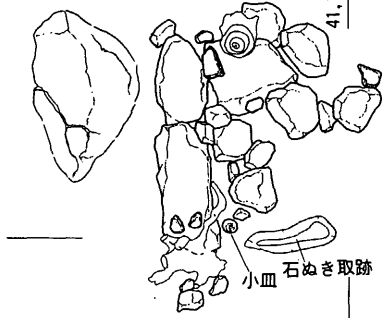


第12図 宝満16次A区遺構実測図2 (1/40)



第13図 宝満16次A区遺構実測図3 (1/40)

宝16SX016

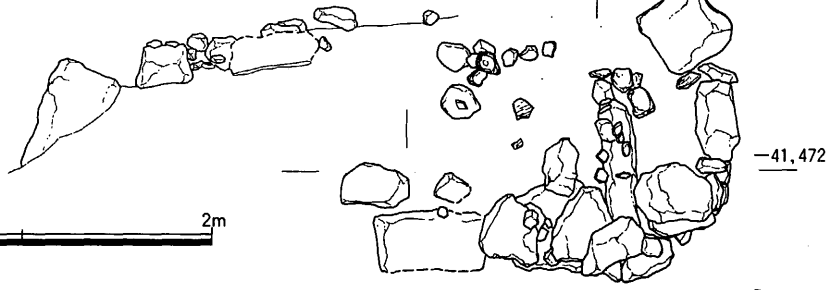


60,006

小皿
石ぬき取跡

225.4 m

宝16SX017



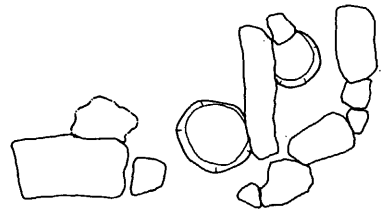
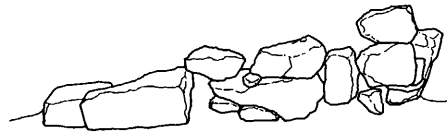
41,472

0 2m

60,012

60,013

226.0 m

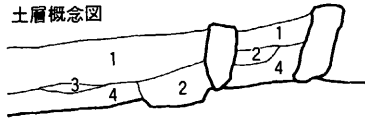


226.0 m

〈土層凡例〉

- 1. 淡紅土
- 2. 黄灰土 (骨入)
- 3. 黑色土 (炭層)
- 4. 赤褐土

土層概念図



第14図 宝満16次A区遺構実測図4 (1/40)

対し20度ほど振れる。ベース面は北ほど高い傾斜面であるが基壇自体は割合水平に造られている。基壇は南側の側石が欠落し抜き取られている。側石は大半が平坦な面を立てて使用されるが一部に横長い部材が重ねて使用される。石組みの中には柱状、板状の花崗岩の標石が5つ立った状態で遺存しており、その標石に対応するかのようには大小5つの納骨ピットが標石の下ないし前面で検出された。納骨ピットの直径は標石の大きさに呼応するかのようには約16～24cmの幅でばらつきがあり、一つには切り合い関係が認められた。出土した骨はごく少量で細かく細片化していた。火葬集骨であろう。

16SX015（第13図、Pl.7）

南側の16SX017と近接しており、この部分では石材の崩壊、抜き取りがあり正確なプランと法量は出せないが長さ4m、幅1.9m、基壇の高さ約0.6mを測り、平面形は長楕円形を呈していたと考えられる。長軸は正方位に対し40度ほど振れる。ベース面は割合水平である。基壇は全般的に谷方向側よりも頂部側に大きめで形状が整った石が用いられており、相対する16SX011、16SX010側に墓道が設定されていた可能性が考えられる。側石は大半が立方体形状の石が使用されるが、間に細かな石も多用されている。石組みの上には柱状の花崗岩の標石が3つ寝た状態で遺存していた。長軸方向の中央には仕切のように一列の石列があり西側の側石は不ぞろいのもが多く、西側は後補の可能性もある。西側のマスの中には白磁皿と青磁小椀が納められた区画がある。そこからは明確に骨片を見いだすことはできなかった。東側列の中央北寄りに直径約20cmの納骨ピットある。出土した骨はごく少量で細かく細片化していた。火葬集骨であろう。

16SX016（第14図、Pl.7）

もともとあったプランの西端のみが遺存した状況で残ったものと考えられる。南側では抜き取られた石の掘方を検出した。長さ0.7m、幅1.2m、基壇の高さ約0.2mを測り、平面形は方形を呈す。長軸は正方位に近い。ベース面は西側に急に傾斜している。石の隙間に土師器の小皿が置いてあった。

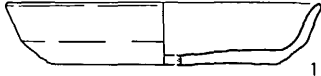
16SX017（第14図、Pl.7）

西、南側、谷側の側石は抜き取られ、本来のプランの形状は不明。現存する法量は長さ2.1m、幅1.4m、基壇の高さ約0.6mを測り、平面形は長方形を呈し北側は後補のマスである可能性がある。長軸は正方位に近い。2カ所に納骨ピットが検出された。骨は細片化したものが少量出土した。南側の大きな石の脇には炭の塊の層位がある。

3. 出土遺物

(1) 土器・陶磁器

宝16SX010 淡紅土



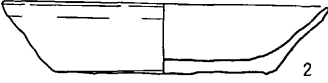
1

宝16SX015 淡紅土



3

宝16SX011



2

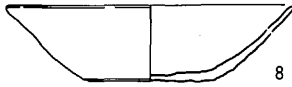
宝16SX015



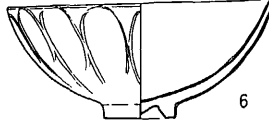
5



4



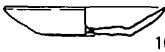
8



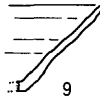
6



表土



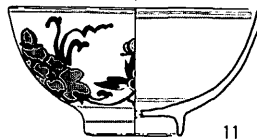
10



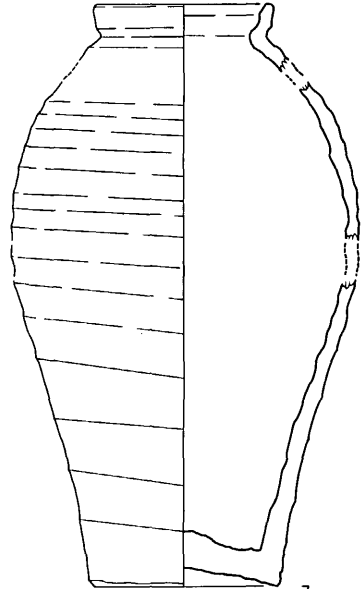
9



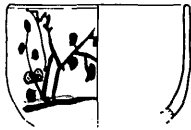
13



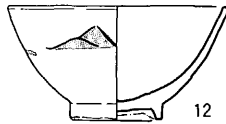
11



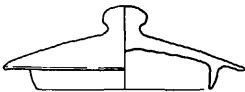
7



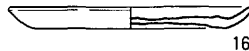
14



12



15



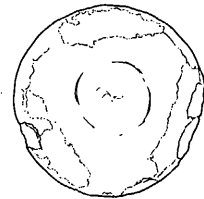
16



17



18



第15図 宝満16次A区出土遺物実測図1 (1/3)

16SX010淡紅土出土土器（第15図、Pla. 10）

土師器

坏a（1） 口径12.4cm、器高2.4cm、底径9.2cmを測る。底部は回転糸切りで板状圧痕が残る。

16SX011出土土器（第15図、Pla. 10）

土師器

坏a（2） 口径12.9cm、器高2.8cm、底径8.8cmを測る。底部は回転糸切りで板状圧痕が残る。

16SX015淡紅土出土土器（第15図、Pla. 8）

土師器

坏a（3.4） 3は口径13.9cm、器高3.0cm、底径8.9cmを測る。底部は回転糸切りで板状圧痕が残る。4は口径13.1cm、器高2.7cm、底径8.6cmを測る。底部は回転糸切りで板状圧痕が残る。プローションから両者は同一工人の手になるものと考えられる。

中国製陶器

白磁皿（5） XI類の完形品。口縁の縁を丁寧に、底部を粗く釉薬をふき取る。口径9.5cm、器高1.5cm、底径6.3cmを測る。

青磁小椀（6） IV類の完形品。釉調は明るい緑色を呈し、体部の連弁は相対する弧状の片彫りで表現する。高台はシャープに削り出される。口径10.4cm、器高4.5cm、底径2.9cmを測る。

中国製褐釉陶器

壺（7） 長胴で短頸の形をなし、上半はロクロ目が顕著に残され、中位以下の過半部はあらくケズリが施される。破碎して出土している。口径7.1cm、器高23.0cm、底径7.6cmを測る。

16SX016出土土器（第15図、Pla. 10）

土師器

坏b（8.9） 8は全体が薄手でロクロ目は残さない。口径11.4cm、器高3.0cm、底径5.0cmを測る。底部は回転糸切りのまま。9は全体が薄手でロクロ目を多少残す。器高3.4cmを測る。底部は回転糸切りのまま。

小皿a（10） 口径6.3cm、器高1.1cm、底径3.6cmを測る。底部は回転糸切りで中央に形成時の亀裂が補修されず残されている。水溶物はいれられない。

表土出土土器（第15図、Pla. 9）

肥前系染付磁器

椀（11.12.13.14） 11は丸椀で全面施釉後に畳付は釉が拭き取られている。見込み中央には昆虫文が体部外面には草花文がある。口径10.0cm、器高5.1cm、底径3.8cmを測る。12の小椀は体部外面に山水を描く。全面施釉後に畳付は釉が拭き取られている。口径6.5cm、器高4.5cm、底径3.6cmを測る。13は丸椀で口径11.0cm、器高3.8cm+ α を測る。14は筒椀で口径7.3cm、器高

4.5cm+ α を測る。体部外面には梅枝が描かれる。11と12は18世紀後半以降の他は19世紀以降の所産か。

陶器

瓶蓋 (15) 土瓶の蓋と考えられ灰色の胎土に透明釉がかかる。口径9.6、器高3.3、かえり口径6.8cmを測る。

土師器

小皿a (16.17) 16は口径9.6cm、器高0.85cm、底径7.4cmを測る。底部は回転糸切りで板状圧痕が残る。13世紀頃の所産か。17は 口径7.2cm、器高1.3cm、底径4.6cmを測る。口縁端部と外面底部付近に油煙の跡があり、灯明皿か灯明の芯押さえとして使用されたと見られる。近世の所産か。

小皿c (17) 口径7.7cm、器高2.2cm、底径5.4cmを測る。

近世の遺物は本調査区に隣接、一部重複する近世墓地に供された供献品、土瓶は福岡地域の諸例より胎盤の埋納容器であったと考えられる。

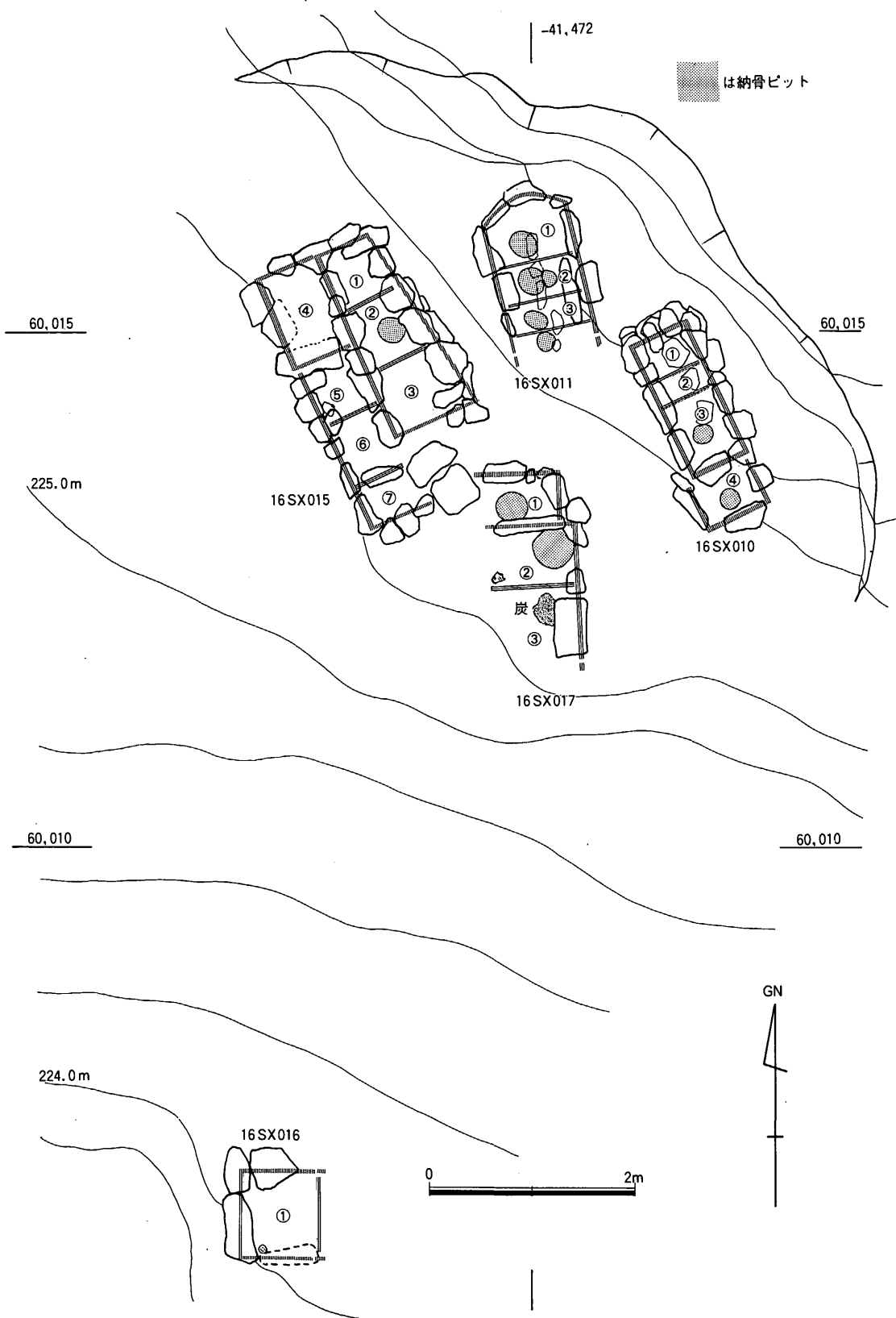
4. 16次A区の調査の小结

墳墓について

各遺構の解説の中で多少触れたが、各石組みの施設はマスの増設や納骨ピットの追加設定などが認められ、基本構造が設定された後に多少の改編を経て使用が終焉している。ここでは再度各石組みの使用の小単位を抽出し時間推移に沿った変化について考えてみたい(第16図)。

16SX010は本体と増設された南側のマスからなり本体は標石の存在と側石の配置から3つに分割した利用があったと推定される。納骨ピットは明確には区画3と4にのみ検出されたが、区画1と2は掘り込みのない状態=石組み築造時に納骨した、ないしは施設表面に散骨、ないしは供養に際し納骨を伴わなかったという各可能性がある。環境的には施設表面の土は埋没課程で流失した可能性もあり、また、遺存したところで土壌が赤色系の花崗岩風化土であり遺構表面に置かれていた場合溶失した可能性も否定できない。16SX011は石の組み方が他とは異なり最も簡素な作りであるが、納骨ピットや標石が一番多く検出された。無理に区分すればプラン内は4区分され2には東側に納骨ピットが追葬されている。区画1と2のピットが大きくこの墓の造営の主体者と見られ、2の小と3、4は追葬された縁者であると考えられる。石組みの西側前面で供献された土師器坏aが出土し、それが持つ年代観から13世紀後半ないし14世紀前半頃に葬送か供養がおこなわれたと考えられる。

16SX015は東列が古く西側のマスは後補のものと考えたが、東列は3区分、西は4区分できる



第16図 宝満16次A区遺構概念図

のではないかと考えられる。後補の西列の中でも区画4と5には使用された石の大きさに違いがあるなどの差異が認められ、この間にも時間的なヒアタスが想定される。マス内に置かれた陶磁器は納骨具の可能性も考えられるが骨片は出土しなかった。既述のごとく土壌環境を考慮する必要があろう。散在していた中国製褐釉陶器壺も破片の出土状態から本来はこの墓の蔵骨器であったと考えられる。標石と考えられるものは区画1、2、5上にあった。平均して16SX010や16SX011を凌ぐ。また、輸入陶磁器を入れるなど副葬品においても優位性を持っている。石組み内埋土や周辺から13世紀後半ないし14世紀前半頃の破碎した土師器坏が出土し、使用期間の一時期が16SX011と同時期であったことを示している。

16SX017は平面プランから16SX015の南東角を壊して造営された観がある。褐釉陶器壺の散乱もそれによるものかとも思われる。しかし、これ自体も西側の石材は抜き取られている。3区画が想定され、うち1は後補の可能性があり、1と2に納骨ピットがあり3に炭の集積層がある。

16SX016は先の4遺構とは距離を置いて存在する。出土遺物に15世紀代と考えられる土師器坏bが出土しており、16SX010、011、015より後出するものと考えられる。主軸の方位が正方位に近く、その点では16SX017と近似し16SX017が16SX015を切る可能性があり、このことから今回検出された石組みの墓群は状況的には大きく13世紀後半から14世紀前半頃の群と15世紀代の群との2つの時期が設定されよう。

15世紀代で本遺跡の追善供養を含めた利用が終焉する背景はどこにあるのであろうか。北部九州においては16世紀を境に終焉する墳墓群の事例が多いことから、造墓者の結縁のスタイルや造墓そのものに対する概念的な変化が、本遺跡の終焉に係わりを持つと考えられないだろうか。しかし、本質的には本遺跡の経営者たる北谷の集落（坊）の時期的な変化が今後の調査で明らかにされた中で再考されるべき問題であろう。

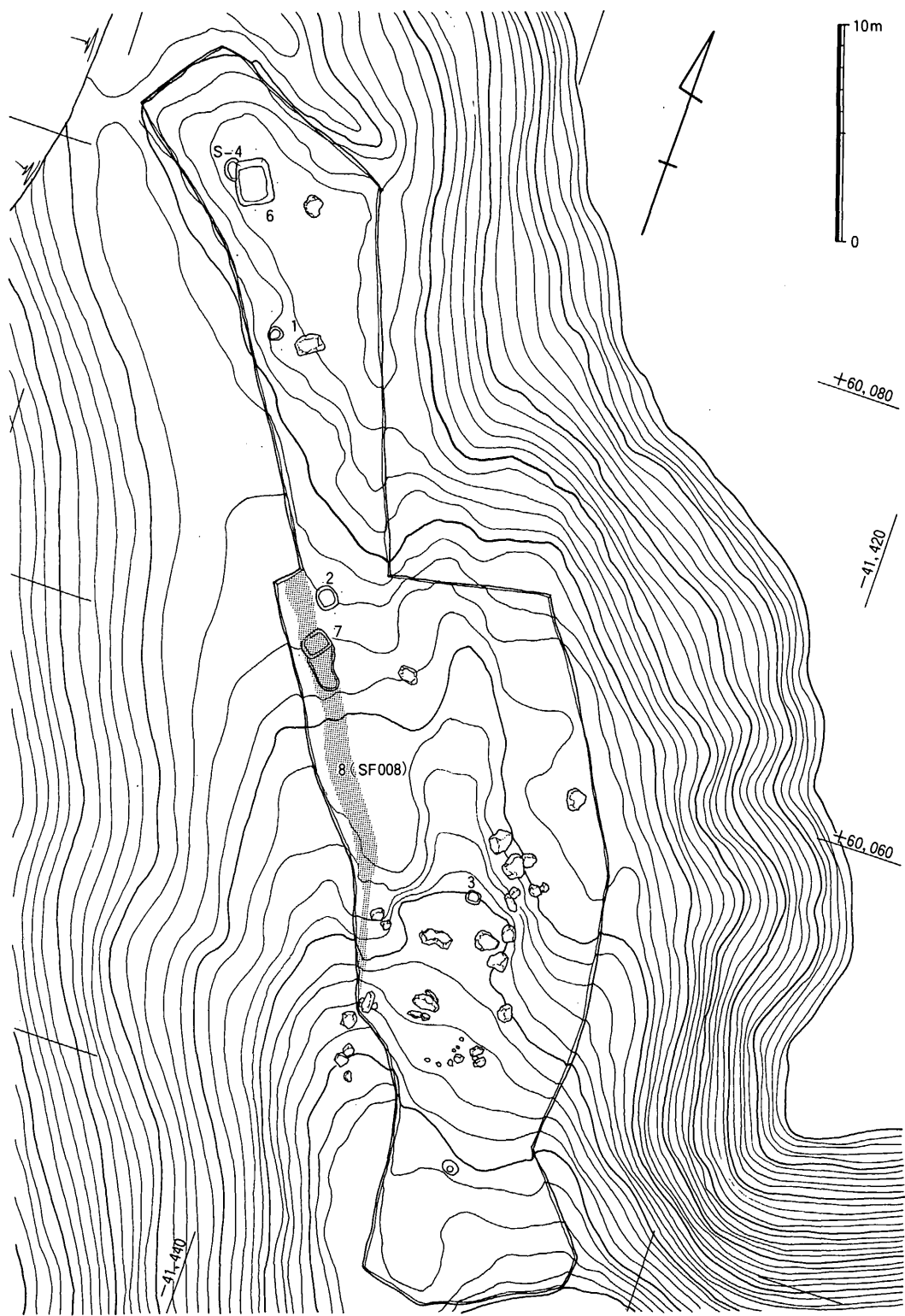
参考文献

胎盤の埋納容器について

井上裕弘ほか「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告書」第9集 1978 福岡県教育委員会

墓について

狭川真一「中世の火葬」1995「シンポジウム中世の火葬 その展開と地域性」東国歴史考古学研究所 帝京大学山梨文化財研究所



第17図 宝満16次調査区全体図2

B 区の調査（第17図、Pla.4）

1. 概要

本地区は標高231mの頂から北西方向に延びる尾根線上にあたり（第6.17図）、事前の調査で花崗岩の露頭や円礫が集積された遺構が確認されていた。基本的には地山まで重機で表土をはぎ取り、石組み周辺は人力で表土剥ぎをおこなった。

土層状況は腐葉土の直下は赤味の強い風化花崗岩由来のいわゆる「真砂土」で、各遺構はこれに掘り込まれる。

2. 検出遺構

(1) 土坑

16SK001（第18図、Pla.11）

土坑の掘り方は直径約0.8m、深さ約0.35mを測り、平面形は不正円形を呈す。掘り方は人為的に埋められ、盛り上げられた上層の上に略2段重ねの花崗岩の角礫が置かれる。骨などの出土は認められなかった。ただし、地山も埋め土も明らかに酸性土壌である。

16SK002（第18図、Pla.11）

土坑の掘り方は長辺1.0m、短辺0.6m、深さ0.2mを測り、平面形は隅丸方形を呈す。掘り方の側面と床の一部の地山が被熱によって赤色化している、いわゆる焼土坑である。骨などの出土は認められなかった。ただし、地山も埋め土も明らかに酸性土壌である。

16SK003（第18図、Pla.11）

土坑の掘り方は直径約0.6m、深さ約0.4mを測り、平面形は方形ないし不正円形を呈す。東側の上部が流失している。掘り方の側面の地山が被熱によって赤色化している、いわゆる焼土坑である。埋土の各層位には炭粒が混入していた。骨などの出土は認められなかった。ただし、地山も埋め土も明らかに酸性土壌である。

16SK004（第18図、Pla.11）

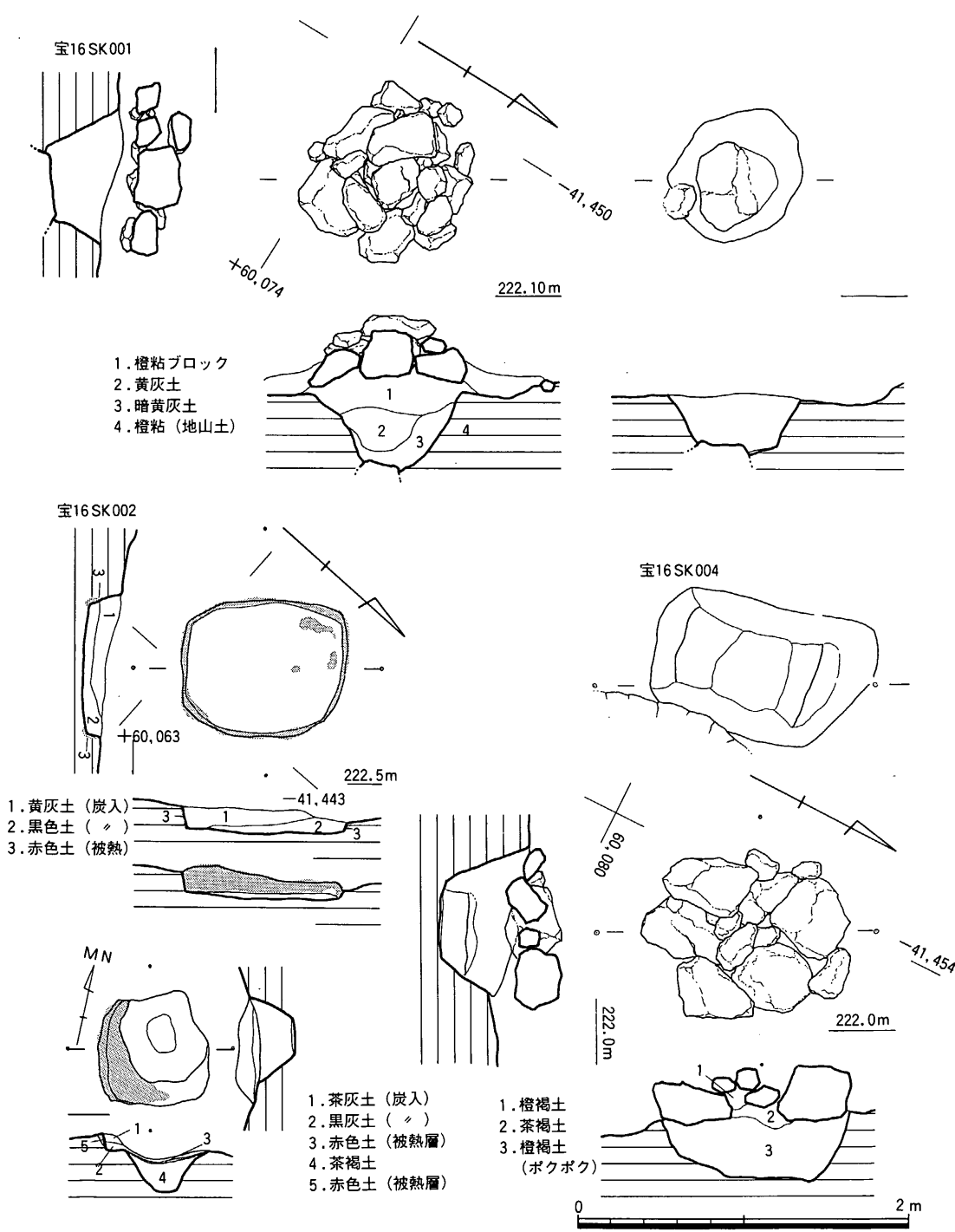
土坑の掘り方は長辺1.4m、短辺0.8m、深さ0.4mを測り、平面形は隅丸方形を呈す。後述の16SK006に切られる。16SK001同様に遺構上面に花崗岩の角礫が置かれる。骨などの出土は認められなかった。ただし、地山も埋め土も明らかに酸性土壌である。

16SK006（第19図、Pla.11）

土坑の掘り方は一辺1.8m、深さ1.3mを測り、平面形は隅丸方形を呈す。16SK004を切る。掘り方に花崗岩の角礫が投げ捨てるようにして埋められる。骨などの出土は認められなかった。ただし、地山も埋め土も明らかに酸性土壌である。

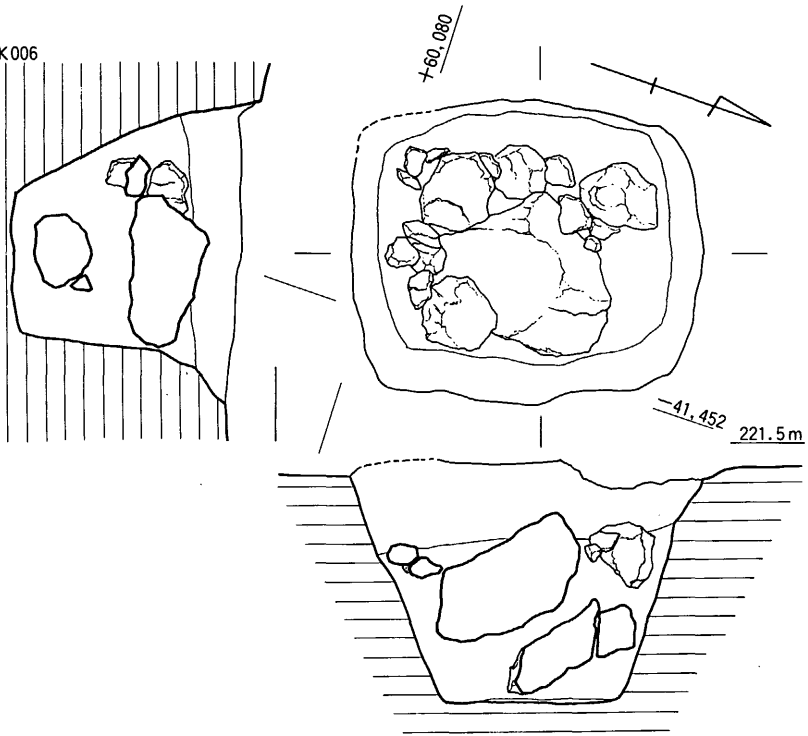
16SK007（第19図、Pla.11）

土坑の掘り方は長辺1.2m、短辺0.8m、深さ約0.5mを測り、平面形は方形を呈す。底面の中

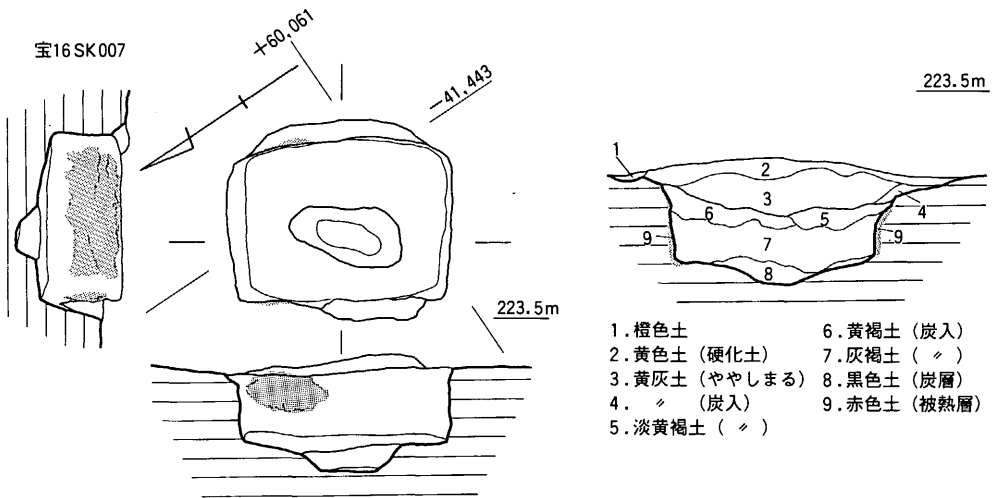


第18図 宝満16次B区遺構実測図1 (1/40)

宝16SK006



宝16SK007



- | | |
|----------------|--------------|
| 1. 橙色土 | 6. 黄褐土 (炭入) |
| 2. 黄色土 (硬化土) | 7. 灰褐土 (◇) |
| 3. 黄灰土 (ややしまる) | 8. 黒色土 (炭層) |
| 4. ◇ (炭入) | 9. 赤色土 (被熱層) |
| 5. 淡黄褐土 (◇) | |



第19図 宝満16次B区遺構実測図2 (1/40)

中央には長軸方向に長い長辺0.6m、短辺0.3m、深さ約0.1mの窪みがある。掘り方の側面の一部の地山が被熱によって赤色化している、いわゆる焼土坑である。埋土の中位以下の各層位には炭粒が混入していた。骨などの出土は認められなかった。ただし、地山も埋め土も明らかに酸性土壌である。後述の16SF008がこの遺構に乗る形で形成されている。5.6層で11世紀代の土師器が2点出土している。

16SF008（第17図）

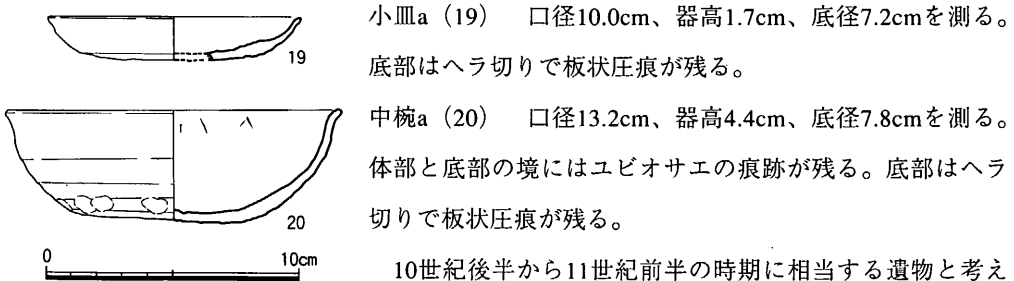
調査区の西側をかすめるように南北方向に幅約2mの帯状の硬化した黄色土が検出された。現地地形でもこの尾根筋を通る踏みわけ道がこれに重複しており、通行によって形成された硬化面、道路状遺構と認定した。16SK007の土層のうち3層までが16SF008である。この断面部位では16SK007の埋土が不等沈下したため16SF008の土層が厚めになっている。他の部位では硬化の断面形状はレンズ状で厚さは約0.15m程度であった。形成時期は11世紀前半以降から現代までの幅が考えられる。

3. 出土遺物

(1) 土器・陶磁器

16SK007出土土器（第20図、Pla. 12）

土師器



第20図

宝満16次B区出土遺物実測図(1/3)

4. 16次B区の調査の小结

土坑群について

本調査地区では6基の土坑を確認したが、その内訳は焼土坑3、礫塊を伴う土坑3であった。前者は14次調査の報告で既述のごとく炭焼きないし遺体焼成の遺構の可能性が指摘されている。時期的には16SK007上面出土遺物より10世紀後半から11世紀前半という一時期が提示されているが全てがこの時期の所産と断定するには資料不足である。先のA区では13世紀代から15世紀に至る集骨埋納をおこなう墳墓施設が発見されており、本市観世音寺子院推定金光寺跡の

墳墓群でも遺体焼成遺構と埋納施設が丘陵頂部とその斜面という近接した場所に営まれる例があることなどから、あながちA、B両区に関連性がないとはいいきれない。本調査地点と隣接する14次調査地点、後述の本調査地点の谷部に当たる16次C区でも同様の焼土坑が見つかっており、かなり広範囲にわたって同様の焼成遺構が形成された実体が明らかとなった。

道路状遺構の硬化現象

16SF008は出土遺物の制約上形成期間が平安後期から現代まで想定されているが、実際、切り合い関係にある16SK007の埋土と本遺構の硬化土間に腐食土層の形成などが観察されない点などからかなり連続性を持ったものとの理解が可能である。この道路状遺構における硬化面の形成については具体的な研究事例はなく、どういったプロセスで硬化現象が起きているのかを考察するため、硬化土状（黄色土）とその下の地山土（橙色土）を採取し、鉱物組成分析と粒度組成分析をおこなった。また、比較検討資料として福岡県築上郡新吉富村の池ノ口遺跡A地点検出の推定古代官道の路面（灰褐土、調査者は路盤とする）とその地山土（黒色土）を調査者のご厚意でご提供いただき、同条件で分析をおこなった（本巻末分析資料参照）。結果は鉱物組成の点に置いては硬化面、地山双方に基本的な差異は認められず、地山土の物理的な変化によって土の粒度が変わったものと判断しうる。粒度の変化の方向性、ありようについては、本宝満16次例は高地の乾燥環境であり、池ノ口遺跡例は低湿地環境での硬化であり、環境の違いによってデータに差異がみとめられる。今後、分析事例を増やす中で再検討が必要であろう。基本的には通行による地山土への集中的加圧やそれによる植物繁茂の阻害、日照の常時照射、一時的な雨水の滞水など様々な要因によって地山土の粒土組成が変化し、漸移的に断面形状が中央がやや厚いレンズ状に硬化してゆくというプロセスが想定される。

参考文献

推定金光寺子院の墳墓

「大宰府史跡」昭和62年度発掘調査概報1988九州歴史資料館

道路状遺構について

秦憲二ほか「池ノ口遺跡」1996福岡県教育委員会



第21图 宝满16次C区全体图 (1/40)

C区の調査（第9.21図、Pla.13）

1. 概要

本地区は標高206～7mにあり、事前の調査で花崗岩の円礫の散在が確認されていた。基本的には表土のみを重機ではぎ取り、石のレベルから人力で掘り下げをおこなった。

土層状況は腐葉土の下は黒灰土、黄褐色土、暗灰土、黄灰土（以上遺物包含層）、明黄色土（無遺物層、地山）の順で堆積している。各遺構は暗灰土上から掘り込まれる16SX020と地山に直接掘り込むそのほかの遺構の2者がある（第22図）。

2. 検出遺構

(1) 墳墓

16SX020（第23図、Pla.15）

土坑の掘り方は長辺1.6m、短辺0.68m、深さ0.56mを測り、平面形は正方位に沿った隅丸方形を呈すが、掘り方下端は北で幅約0.24mほど一段高く掘り残され、中央やや北よりの一部がくびれている。掘り残し部分には東に寄った位置にかなり傾斜して土師器の坏2枚、小皿4枚が検出された。この出土状況からこれらの土器は遺体頭部位置の棺の蓋の上に一括して供献され、棺蓋が朽ちて陥没する段階で棺内に入ったものと考えられる。掘り方両側面には土層断面の観察により板が立っていたと考えられる痕跡があり、木棺墓であったと考えられる（しかし、底板の痕跡は確認されなかった）。掘り方の上に盛り上げられた上層の上に花崗岩の円礫が長辺2.4m、短辺1.6mの範囲に略方形プランで置かれている。掘り方からは骨などの出土は認められなかった。ただし、地山も埋め土も明らかに酸性土壌である。供献土器の時期は13世紀前半前後を示している。

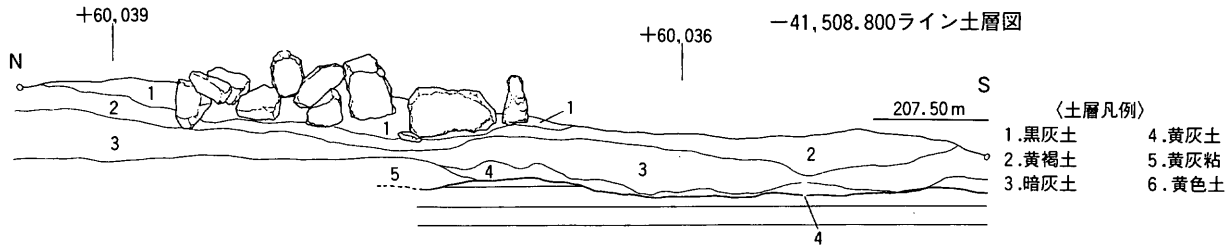
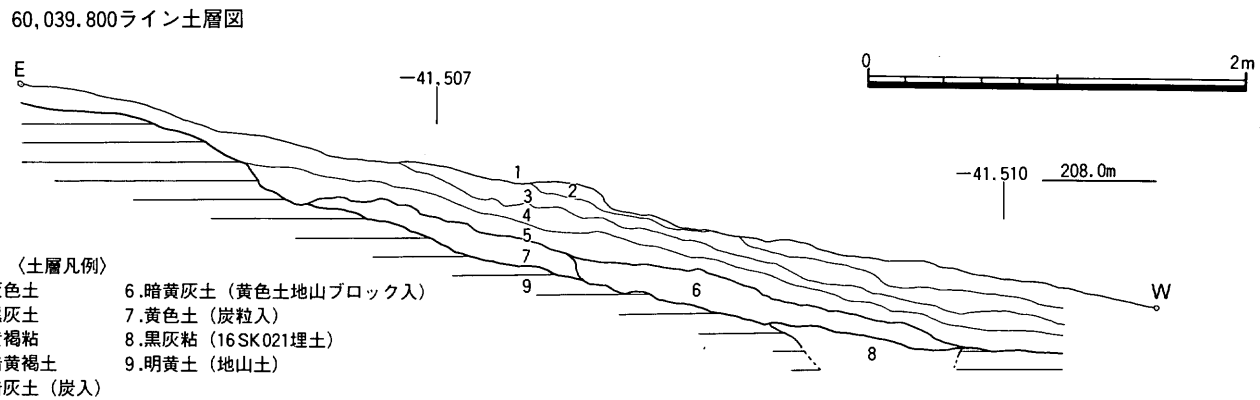
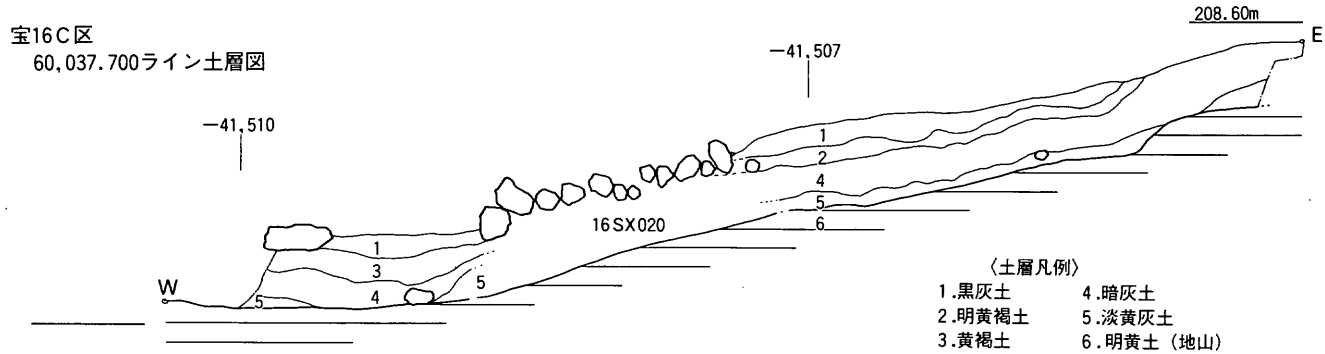
(2) 土坑

16SK021（第23図、Pla.14）

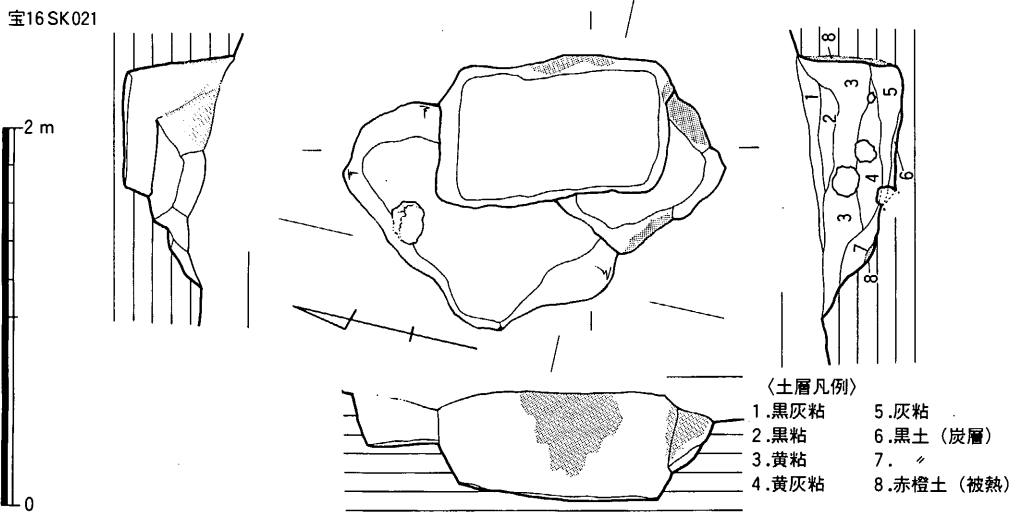
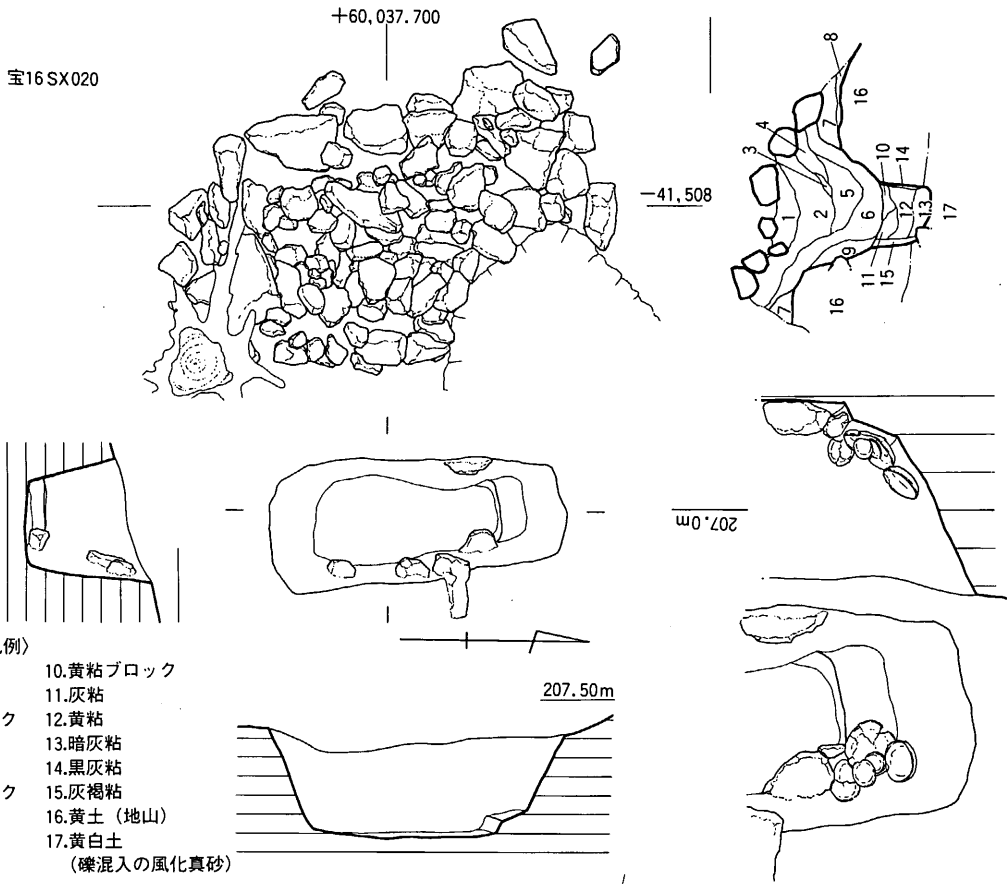
土坑の掘り方は3つの遺構が重なった状況を示している。うち北西側の不整形なプランは攪乱された掘り方である。残りの掘り方は長方形の土坑が折り重なっており残りの良いプランの方は長辺1.2m、短辺0.6m、深さ0.56mを測り、もう一方の短辺は0.8mである。掘り方の側面の地山が被熱によって赤色化している、いわゆる焼土坑である。骨などの出土は認められなかった。ただし、地山も埋め土も明らかに酸性土壌である。

16SK023（第24図、Pla.15）

土坑の掘り方は直径約1.8m、深さ約0.56mを測り、平面形は不正円形を呈す。土層の状況から遺構上面と北西側半分には掘り返しが認められる。上位の黒色系の土層は表土近くの層からの供給の土である。本来は浅い段を持つ方形の掘り方が底部にあったらしい。骨などの出土は認められなかった。

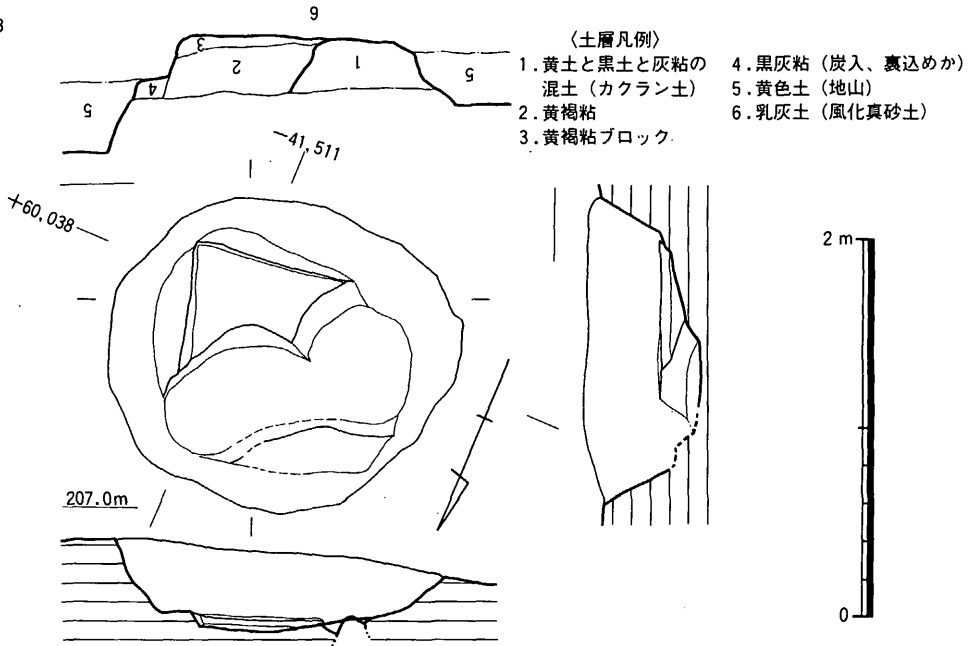


第22図 宝満16次C区土層図 (1/40)

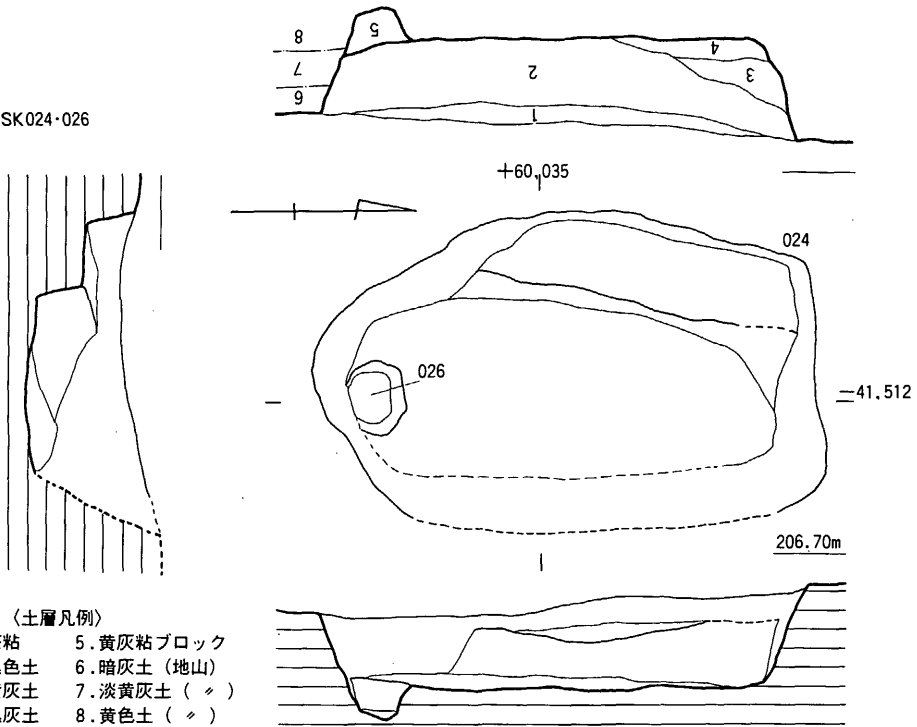


第 2 3 図 宝満 1 6 次 C 区 遺 構 実 測 図 1 (1/40.1/20)

宝16SK023



宝16SK024・026



第 2 4 図 宝満 1 6 次 C 区 遺 構 実 測 図 2 (1 / 4 0)

16SK024 (第24図、Pla.14)

土坑の掘り方は長辺2.68m、短辺1.6m、深さ0.6mを測り、平面形は不正長円形を呈す。黒色系の土層は表土近くの層からの供給の土である。掘り方は西側に一段低くなっている。

(3) その他の遺構

16SX026 (第23図)

16SK024の底部の北側に直径約0.4m、深さ0.2mほどのピットを検出した。土層から16SK024より古い可能性もある。土師器の小皿と伴に鉄釘が出土している。

3. 出土遺物

(1) 土器・陶磁器

16SX020暗灰粘出土土器 (第25図、Pla. 12・17)

土師器

坏a (21.22) 21は口径13.4cm、器高2.6cm、底径8.0cmを測る。底部は回転糸切りで板状圧痕が残る。22は口径15.0cm、器高2.8cm、底径8.6cmを測る。底部は回転糸切りで板状圧痕が残る。

小皿a (23~26) 23は復元口径9.2cm、復元器高1.2cm、底径8.0cmを測る。底部は糸切りで板状圧痕が残る。24は口径9.2cm、器高1.0cm、底径7.3cmを測る。底部は糸切りで板状圧痕が残る。25は復元口径8.3cm、復元器高0.9cm、底径6.1cmを測る。底部は糸切り。26は小片で復元には難がある。復元口径9.0cm、器高1.0cm、底径7.4cmを測る。

在地土器の型式は大宰府編年XV期、13世紀前半の時期に相当する遺物と考えられる。

16SX020黄灰土出土土器 (第25図)

土師器

小皿a (27) 27は復元口径8.7cm、器高1.2cm、底径7.6cmを測る。底部は糸切り。

輸入陶磁器

白磁

碗 (28) 内面の口縁付近に圈線、その下に櫛目を施す。VIII類。

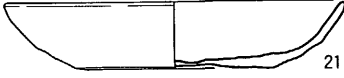
16SX020明黄褐土出土土器 (第25図、Pla. 12・16)

輸入陶磁器

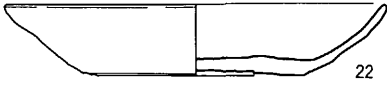
白磁

碗 (29.30) 29は大きめの玉縁を持つ。釉は内面の一部にかかっていない部位がある雑なものである。釉調は光沢のある多少緑かかった灰色。口径16.8cm、器高6.9cm、底径6.6cmを測る。IV-1類。30は内面の口縁付近に圈線、その下に櫛目を施す。釉調は光沢のある多少緑かかった灰色。口径15.4cm、器高4.5cm、底径5.6cmを測る。VI-1-b類。

宝16SX020 暗灰粘

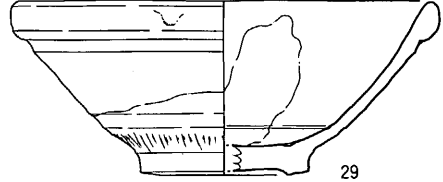


21

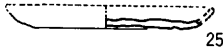


22

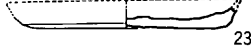
宝16SX020 暗黄褐土



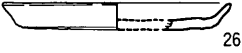
29



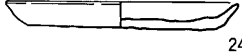
25



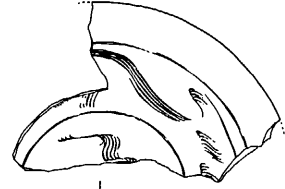
23



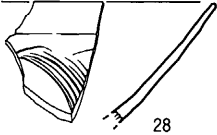
26



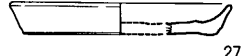
24



宝16SX020 黄灰土



28

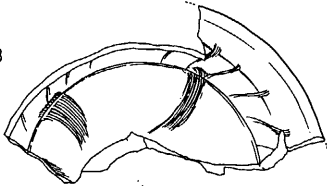


27



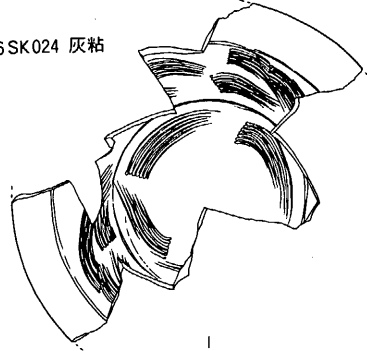
30

宝16SK023

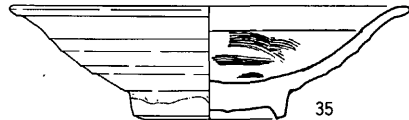


31

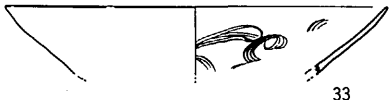
宝16SK024 灰粘



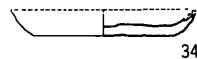
32



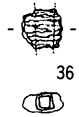
35



33



34

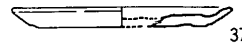


36



38

宝16SX026



37

第25图 宝满16次C区出土遗物实测图1 (1/3)

16SK023出土土器（第25図、Pla.16）

輸入陶磁器

白磁

椀（31.32） 31は短く折れる口縁を持つ。内面の底部と体部に放射状の櫛目が等間隔に施される。大宰府では出土例は少ない。12世紀前半に位置づけられる被災廃棄土坑一括出土遺物である博多79次1827号遺構出土例は皿として報告されている。釉調は光沢のある白味が強い灰色。口径14.6cm、器高4.0cm、底径6.2cmを測る。IV-2-b類。32は内面の体部に櫛目を施す。釉調は光沢のある多少緑かかった灰色。口径15.8cmを測る。VI-1-b類。

青白磁

椀（33） 内面には櫛目による文様が入る。生地は白色で釉は水色を帯びた透明色と呈す。復元口径15.0cm。

16SK024灰粘出土土器（第25図、Pla.16）

土師器

小皿a（34） 27は復元口径7.2cm、器高1.0cm、底径5.6cmを測る。底部は糸切り。

輸入陶磁器

白磁

椀（35） 35は内面の口縁付近に圏線、その下に櫛目を施す。釉調は光沢のある多少緑かかった灰色を呈す。口径15.8cm、器高4.5cm、底径6.0cmを測る。VI-1-b類。

金属製品

釘（36） 内部に6mm角ほどの立方形の芯があり、表面は錆が巻いた芯長軸と直交方向に木目を残す木質が残存している。

16SX026出土土器（第25図）

土師器

小皿a（37） 37は復元口径8.6cm、器高0.8cm、底径6.4cmを測る。底部は糸切り。

金属製品

釘（38） 内部に6×7mm角ほどの立方形の芯があり、表面は錆が巻いた芯長軸と直交方向に木目を残す木質が残存している。

黄灰土出土土器（第26図、Pla.17）

土師器

坏a（39） 体部外面には軽い段をなすヨコナデを残すもので（太宰府市大町遺跡の坏aに見られるナデa）復元口径16.4cm、器高3.1cm、底径12.0cmを測る。小片のため復元には多少難がある。底部は糸切り。

小皿a (40.41) 40は復元口径9.6cm、器高0.9cm、底径7.5cmを測る。底部は糸切り。41は復元口径7.2cm、器高0.9cm、底径5.4cmを測る。底部の調整は不明。

輸入陶磁器

白磁

椀 (42.43) 42は大きめの玉縁を持つ。釉調は光沢のある灰色。口径16.9cmを測る。IV類。43は内面の口縁付近に圈線、その下に櫛目を施す。口径16.8cmを測る。釉調は光沢のある灰色味を帯びた透明釉。VIII類。

暗灰土出土土器 (第26図、Pla. 16・17)

土師器

小皿a (44) 44は復元口径9.8cm、器高0.9cm、底径7.5cmを測る。底部は回転糸切り。

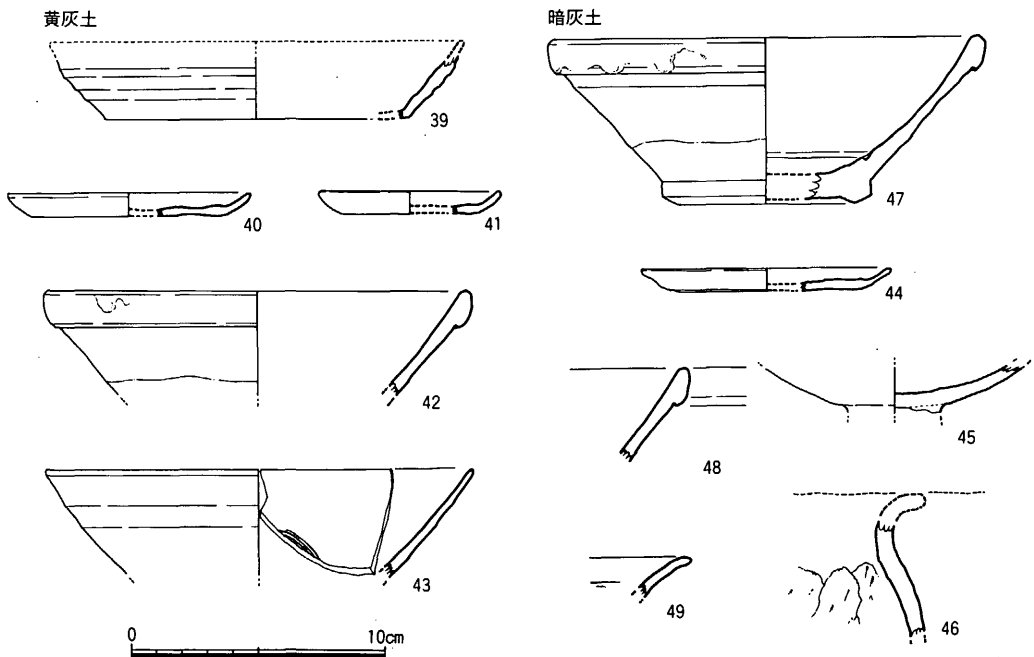
高坏 (45) 赤みの強い胎土で、底に脚装着のためと思われる刻みがある。古墳時代以降の所産であろう。

甕 (46) これも赤みの強い胎土で、内面にケズリを施す。6世紀以降のものか。

輸入陶磁器

白磁

椀 (47.48.49) 47.48は大きめの玉縁を持つ。釉調は光沢のある灰色。47の法量は、口径17.2cm、器高6.6cm、底径8.2cm。IV類。49は内面の口縁付近に圈線、その下に櫛目を施すと思われる。釉調は光沢のある多少緑かかった灰色を呈す。VI-1-b類か。



第26図 宝満16次C区出土遺物実測図2 (1/3)

4. 16次C区の調査の小結

土坑群について

本調査区は出土遺物より（6、7世紀の古墳時代のものを除けば）12世紀後半頃から使用が始まり、焼土坑と土坑が形成される。焼土坑の性格は先の調査の小結で触れたが、遺体焼成施設の可能性が高い。他の土坑も攪乱（盗掘の可能性あり）を受けているが、埋土中に鉄釘が依存するなど棺が埋納されていた可能性があり、12世紀代以降の木棺墓群であった可能性がある。遺構周辺に散在する花崗岩の礫はこれら遺構の上にあった標石の可能性も考えられる。同様に包含層中に散らばった陶磁器なども副葬品が攪乱によって飛散したものかも知れない。16SX020はこれら遺構の中でも最終段階で形成されたもので、これをもって本地点は墓所としての使用は終焉する。多少のヒアタスがあった後、既述のA区の墳墓群が現れるものと考えられる。

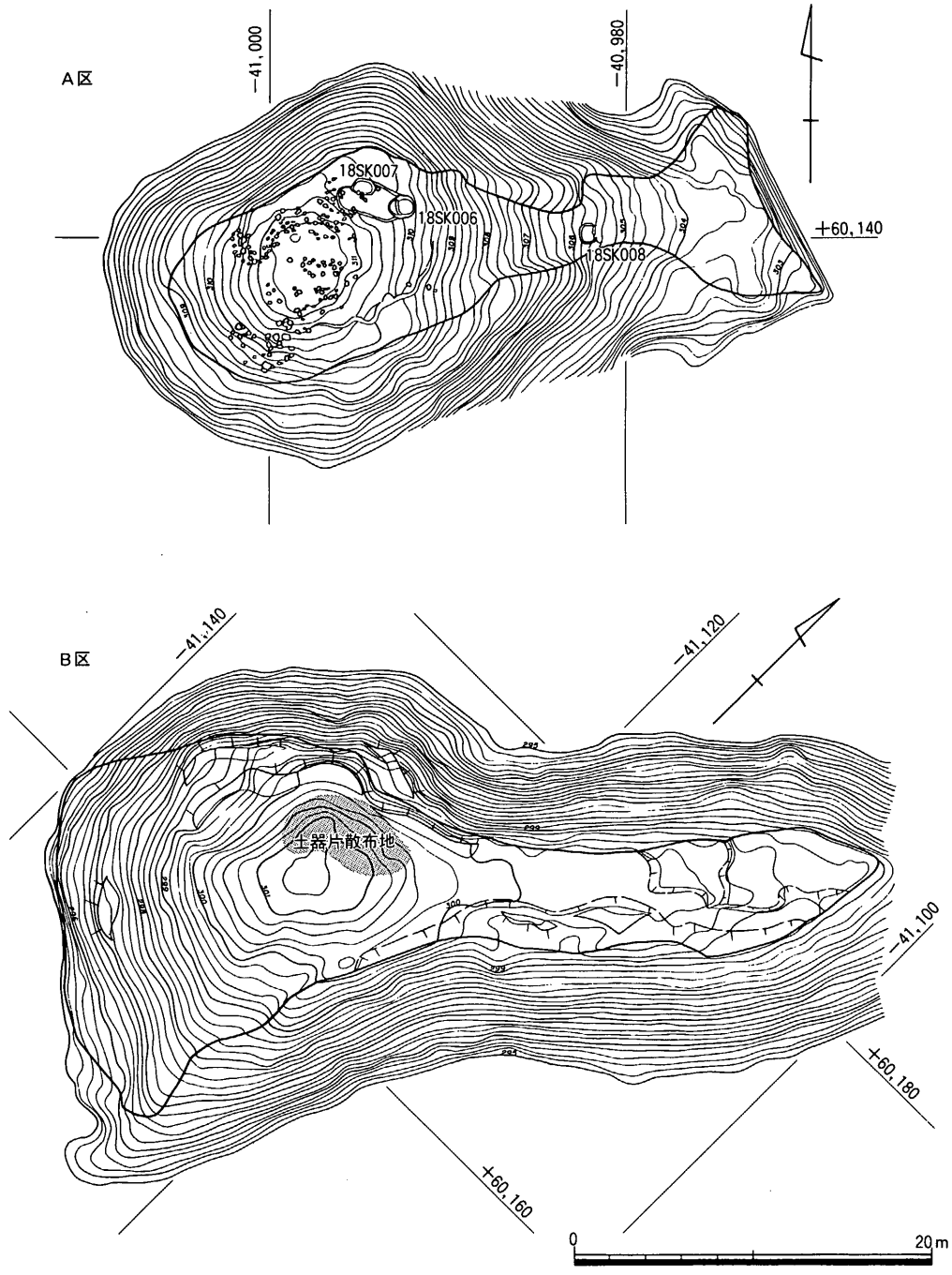
参考文献

博多79次1827号遺構について

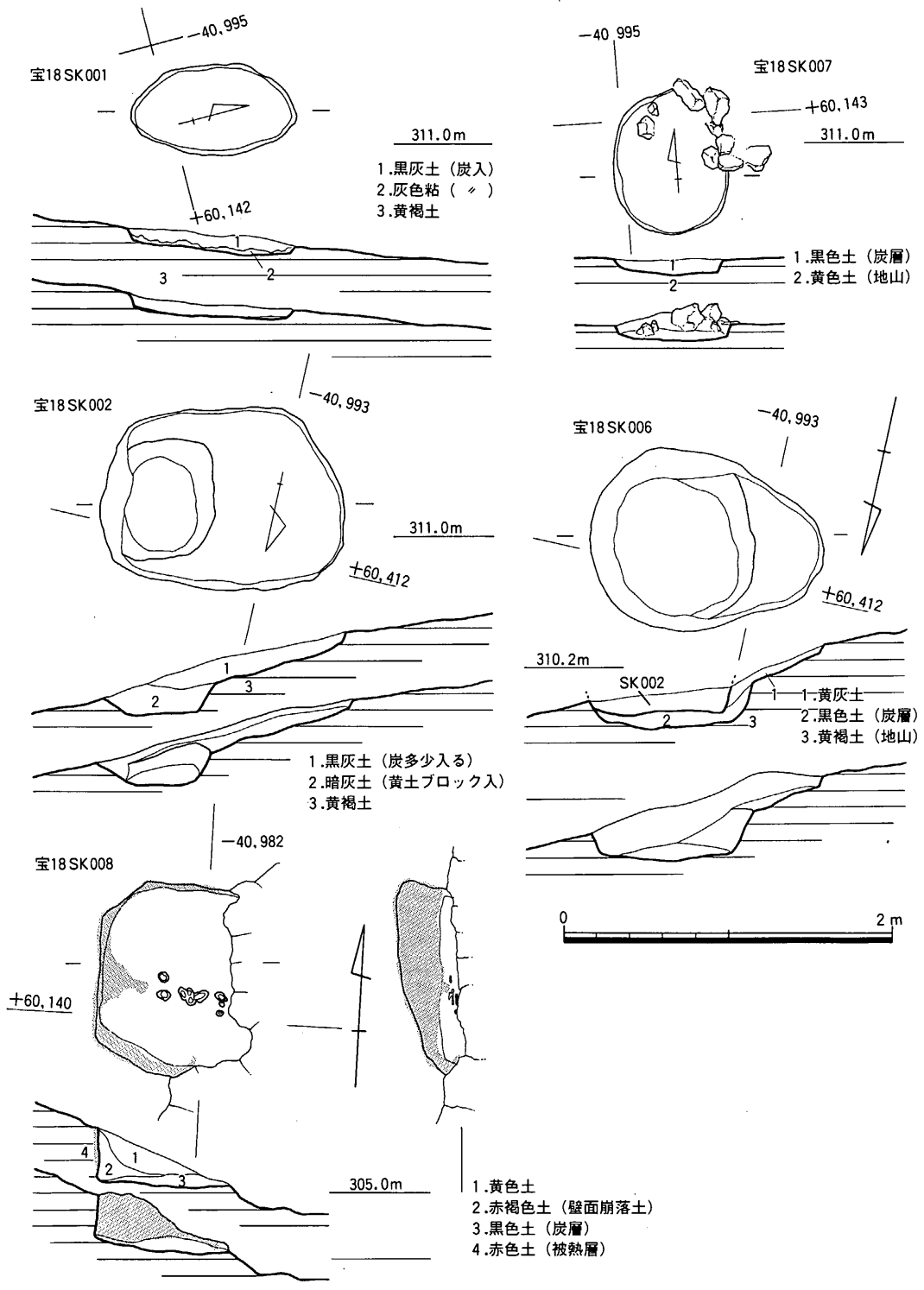
大庭康時「博多50」1996福岡市教育委員会

土師器のナデについて

「大町遺跡」1992太宰府市教育委員会



第27図 宝満18次調査区全体図



第28図 宝満18次遺構実測図 (1/40)

(3) 第18次調査

調査地は、太宰府市大字北谷字熊崎2-1.667-1に所在する。調査は平成7（1995）年6月6日から6月19日まで実施した。調査面積は3300m²で、調査は山村信榮が担当した。

なお、全体図の作成は航空測量写真図化によった。

調査は踏査の結果2カ所を対象としておこない（第6図）、丘陵頂部をA区、尾根線上をB区、として調査区を設定し調査をおこなった。以下、各地区別に成果を述べる。

A区の調査（第27図、Pla.18）

1. 調査概要

本地区はダム本体の貯水部位にあたり、調査後に丘陵そのものが消失した。丘陵頂部には狭いながら平坦面があり部分的に花崗岩が露頭していた。検出遺構は重機で表土を除去した時点で確認された。

2. 検出遺構

(1) 土坑

18SK001（第28図）丘陵頂部北側にあり炭が詰まった遺構である。土坑の掘り方は長辺1.0m、短辺0.6m、深さ0.1mを測り、平面形は長楕円形を呈す。土層関係では後述の18SK006の上に形成されている。

18SK002（第28図）土坑の掘り方は長辺1.5m、短辺1.1m、深さ0.3mを測り、平面形は長楕円形を呈す。西側に一段低い部分がある。18SK008は下層遺構である。

18SK007（第28図、Pla.19）露頭礫の隙間に穿たれた遺構で、土坑の掘り方は長辺0.9m、短辺0.7m、深さ0.1mを測り、平面形は長楕円形を呈す。露頭石の表面は多少赤色化し、遺構底面も周辺の地山に比べ黄味が強く遺構内で火が焚かれた可能性がある。

18SK006（第28図、Pla.19）土坑の掘り方は長辺1.4m、短辺1.1m、深さ0.3mを測り、平面形は長楕円形を呈す。西半分が一段深い。底部の層は炭の堆積層である。壁面はさほど焼けていない。

18SK008（第28図、Pla.19）頂部東側の傾斜面に穿たれた遺構で、東側は木の根を重機で掘り取った際に欠損した。土坑の掘り方は長辺1.2m、短辺0.7m、深さ0.1mを測り、平面形は隅丸方形を呈す。壁面の地山と床面がかなり赤色化している、いわゆる焼土坑である。遺構底面には不定形な炭の入った窪みが複数ある。燃焼を調整した際に棒で突いた痕跡と考えられる。

3. 出土遺物

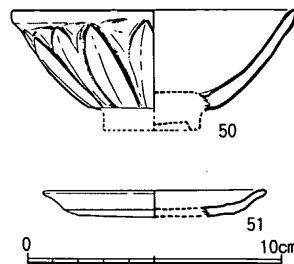
(1) 土器・陶磁器

表土出土土器（第29図、Pla. 20）

輸入陶磁器

青磁

小椀（50） ケズリによる連弁を前後交互に表現する。釉調はうす緑色を呈す。I-V-b類。



第29図

宝満18次出土遺物実測図（1/3）

4. 18次A区の調査の小結

検出された土坑群は18SK008が確実な焼土坑であるが、他は掘り方は浅く、炭が詰まっているものの壁や床が明確には焼けておらず、炭層の土壌をすべてを水洗弁別したが骨片は確認されなかった。立地は切り立った峰の上であり炭焼き遺構とされる典型的な焼土坑とも立地の点でも異なる。本丘陵は北西方向に粕屋平野を通じ玄界灘を望み、南東方向には筑後平野を望む位置にあり、福岡県杷木町西ノ迫遺跡例のような狼煙に関係する遺構の可能性が考えられる。時期については龍泉窯系青磁小椀が出土しているが遺構との直接的な関係は指摘できない。

参考文献

西ノ迫遺跡

「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告」25 1993 福岡県教育委員会

B区の調査（第27図、Pla.18）

1. 調査概要

本地区はダム堤の取り付け部位にあたり、丘陵頂部が尾根状に延び、人為的所産と考えられる平坦面が検出された。部分的に花崗岩が露頭していた。平坦面以外に明確な遺構は検出し得なかった。丘陵頂部付近で土師器の小片が散乱する箇所があった。

2. 出土遺物

(1) 土器

表土出土土器（第29図）

土師器

小皿（51）復元口径8.8cm、器高1.1cm、底径7.1cmを測る。底部調整は不明。小片のため復元には多少難がある。

3. 18次B区の調査の小結

調査では明確な掘り込まれた遺構は確認されなかったが、人的平坦面の存在で平安後期以降のとある時期に利用されていた事がわかった。18次A区とは相対す位置にあり、関連性があるのかもしれない。

青銅器鑄型素材小考

調査中に本地区の斜面に白色の肌理のそろった角礫が崩壊散布している箇所を発見した(Pla. 21)。現地を西南学院大学教授唐木田芳文教授にご覧頂き、次のような所見を得た。本花崗岩風化土の丘陵に貫入する白色の石脈はルーペによる観察ではいわゆるアプライトと判断される。弥生時代の佐賀、福岡平野で出土する青銅製品の鑄型の素材に用いられることが多い素材は顕微鏡観察によれば「石英-長石斑岩」と考えており、「石英-長石斑岩」には特徴として微細な白雲母=絹雲母が多く含まれ、それはルーペ観察によって明確にアプライトと弁別する際の注目属性となっている、とのことであった。ところがその後、唐木田先生に太宰府市出土の青銅製品の鑄型の素材鑑定をいただいたところ、本市国分松本遺跡1次調査出土のものの一つがアプライトである可能性があることが判明した。アプライト露頭の存在については昭和5年に中山平次郎が「太宰府付近における弥生式系統遺跡調査」のなかで太宰府天満宮裏山付近の頂で触れており、本調査地点を含め宝満山の複数の箇所でも露頭が確認できる。今後は原石、出土遺物を含め、顕微鏡や鉍物組成レベルでの比較検討が必要となろう。

参考文献

鑄型石材

唐木田芳文「弥生時代青銅器の鑄型石材考」1993「科学と随想 蟻塔」第39巻第2号共立出版株式会社

中山平次郎「太宰府付近における弥生式系統遺跡調査」1930「考古学雑誌」第20巻第9号

IV. 総括

本報告による調査成果を列挙しておく。

- 1 各調査区で焼土坑が検出されたが、遺構の立地は多様でありさらに周辺のかなり広範囲に広がりを持つと考えられる。
- 2 この一帯が平安後期から近現代に至るまで(北谷地区の坊経営に係わる人々の)墓所であったことが判明した。

V.資料

宝満16次調査の道路状遺構の硬化現象に関する自然科学分析について

本稿は平成6年度に太宰府市教育委員会がバリノ・サーヴェイ株式会社に分析依頼し提出された報告の内、関連のある箇所を抜粋して紹介するものである。

土層の母岩や風化環境推定

1. 目的および試料

池の口遺跡の道路状遺構、宝満山遺跡第16次調査の道路状遺構の各土層について、母岩や風化環境を把握するため、構成粘土鉱物の同定をX線回析により行った。

試料は、池の口遺跡が黒灰色土層（非硬化面）の黒色土、灰褐色土層（硬化面）の灰褐色土2点、宝満山遺跡が黄色土層（硬化面）の黄色土および橙色土層（非硬化面）の橙色土の2点、である。

2. 分析方法

(1) 粘土鉱物分析

未風化乾土試料約50gをトルビーカーにはかりとり、過酸化水素処理による有機物分解、分解後の上澄み液の除去処理、攪拌・超音波処理、1N水酸化ナトリウムまたは1N塩酸による粘土分散処理を経て、1 l 沈底瓶に分散液を移した。これを水で1 l に定容した後、手で激しく振とうし、液温約20℃で8時間静置した。静置後、水深10cmからサイフォンで粘土懸濁液部分を採取した。この懸濁液の一定量を2本の10 ml容遠沈管に採取し、脱鉄処理（DCB処理）または脱アロフェン処理（Tamm処理）を行った。これに8mlの1N酢酸ナトリウム緩衝液（pH5.0）を加えて攪拌し、遠心操作で上澄み液を捨てた。この操作をもう一度繰り返し、ナトリウム飽和粘土とした。遠沈管の1本に1N酢酸マグネシウム（pH7.0）、もう1本に1N酢酸カリウム（pH7.0）8 mlをそれぞれに加え攪拌・遠沈・洗浄操作を2回行った（前者がマグネシウム飽和試料、後者がカリウム飽和試料）。8 mlの水を加えて攪拌・遠沈・洗浄操作で過剰の塩溶液を除いた。遠沈管をろ紙上に約10分間倒立させて水を切り、新たに1 mlの水を加えて粘土を懸濁させた。この懸濁液をマイクロピペットを用いてスライドガラス上に塗布し全面に広げて温室で風乾した。これら2試料を以下の測定条件でX線回析装置により測定した。さらにマグネシウム飽和試料では0.1mlの2%グリセロール水溶液を塗布して風乾した試料、カリウム飽和試料では300℃で1時間加熱、550℃で1時間加熱した試料を再び同じ条件で測定した。これら5つの処理における回析線のピークパターンから粘土鉱物を同定した（和田,1966；日本粘土学会,1987）。

なお、スケールアウトしたピークは、その前後をCount Full Scale10,000C/Sで再度走査させた。

装置：島津製作所製XD-3A

Target：Cu (K α) Scanning Speed：2° /min

Filter：Ni Chart Speed：2cm/min

Voltage：30KV Divergency：1°

Current：30mA Recieving Slit：0.3mm

Count Full Scale：5,000C/S Scanning Range：2～30°

Time Constant：1.0sec

(2) 粒度分析

宮本ほか（1988）を参考にふるい分け法と比重浮ひょう法で行った。

試料を風乾し、2000um篩でふるい分け、篩上残留物を水洗した。これを加熱乾燥後、64mm、4mmの篩でふるい分け、各篩の残留物質量を測定した。一方、2000um篩通過試料（風乾細土試料）については、風乾細土試料20～50gを1 l ビーカーに正確にはかりとり、水と30%過酸化水素水を加え、熱板上で有機物分解をおこなった。分解終了後、水を約500mlと分散剤（4%カルゴン）20mlを加え、攪拌しながら30分間音波処理をおこなった。1 l 沈底瓶にこの懸濁液すべてを移し、往復振とう機で1時間振とうした。振とう終了後、水で全量を1 l にし、沈底瓶を1分間手で激しく振り、直ちに静置した。所定の時間（1,2,5,15,30,60,240,1440分後）に比重計を懸濁液中に挿入してその値を読みとり、別に測定した液温、メニスカス補正、土粒子の真比重から加積通過率（質量%）を求めた。比重計による読みとりが終了した後、懸濁液を63um篩で水洗した。63um篩残留物を105℃で5時間加熱乾燥した後、1000um、500um、250um、125um、63umの篩でふるい分けて各篩残留物の質量を測定した。64mm,4mmを含む各篩毎の質量から加積通過率を求め、比重計の加積通過率とともに粒径加積曲線を描いた。（以下表1、2を参照）

(3) 結果

粘土鉱物分析では、各試料のX線回析チャートを図1～図4に示し、そこから検出された粘土鉱物を表1に示した。

粒度分析では、各試料の粒径加積曲線を図5～8に示し、粒径毎の質量%を表2に示した。

検出された粘土鉱物について以下に記す。記載は、地団研ほか（1981）の「地学事典」、久馬ほか（1993）の「土壌の事典」、岩生ほか（1992）の「粘土の事典」を参考にした。

1 池の口遺跡 黒灰色土

・粘土鉱物組成

表1 池ノ口遺跡、宝満遺跡の堆積土壌の結晶粘土鉱物組成

試料名		結晶質粘土鉱物組成
池ノ口	黒色土	Ch, It, Cr > H.H., Kn
	灰褐色土	Cr > Ch, It > H.H., Kn
宝満山	黄色土	Ch ≫ It > Kn
	橙色土	Ch > It > H.H., Kn
太宰府条坊跡 S-20	灰色粘土	Ch > It, H.H., Kn

注) … Ch ; 緑泥石 (chlorite), It ; イライト (illite), Cr ; クリストバライト (crystalobalite), H.H. ; ハロイサイト(10Å) (halloysite(10Å)), Kn ; カオリン鉱物 (kaolin minerals)

表2 池ノ口遺跡、宝満遺跡の堆積土壌の粒度組成

粒径区分	礫 mm	砂 mm					泥 μm		
		極粗粒	粗粒	中粒	細粒	極細粒	シルト	粘土	
試料名	2.00>	1.00	0.50	0.25	0.125	0.063	39	39<	
池ノ口	黒色土	4.0	1.3	1.3	2.9	4.2	4.3	41.2	40.8
	灰褐色土	0.5	0.7	0.6	1.6	3.0	3.3	32.4	57.9
宝満山	黄色土	9.1	7.2	3.6	3.3	2.1	2.2	26.0	46.5
	橙色土	3.6	4.2	2.8	2.2	1.5	2.8	10.9	72.0

マグネシウム飽和試料のX線回析として14.2 Å ($2\theta : 6.2^\circ$)、10.2 Å ($2\theta : 8.7^\circ$)、7.24 Å ($2\theta : 12.2^\circ$)、5.01 Å ($2\theta : 17.7^\circ$)、4.09 Å · 4.05 Å ($2\theta : 21.7 \cdot 21.9^\circ$)、3.59 Å · 3.55 Å ($2\theta : 24.8 \cdot 25.1^\circ$)、3.35 Å ($2\theta : 26.6^\circ$) に主要ピークが認められる。これら主要ピークのうち、10.2 Åのピークはグリセロール処理によって11 Å付近 ($2\theta : 8^\circ$ 付近) へ不完全な膨張が認められ、7.24 Åのピークは550°C加熱処理によってほとんど消失する。

したがって、本試料では緑泥石 (chlorite)、ハロイサイト (10 Å) (halloysite (10 Å))、イライイト (illite)、カオリン鉱物 (kaolin minerals)、クリストバライト (cristobalite) が検出される。

・粒土組成

僅かに礫 (4%) と砂 (14%) が混じるが、80%以上が泥 (シルト・粘土) の組成を示し、シルトと粘土はほぼ半々の割合である。

2 池の口遺跡 灰褐色土 (硬化面)

・粘土鉱物組成

X線回析線として14.2 Å ($2\theta : 6.2^\circ$)、10.0 Å ($2\theta : 8.8^\circ$)、7.13 Å ($2\theta : 12.4^\circ$)、5.01 Å ($2\theta : 17.7^\circ$)、4.74 Å ($2\theta : 18.7^\circ$)、4.09 Å · 4.05 Å ($2\theta : 21.7 \cdot 21.9^\circ$)、3.59 · 3.55 Å ($2\theta : 24.8 \cdot 25.1^\circ$)、3.35 Å ($2\theta : 26.6^\circ$) に主要ピークが認められる。各処理では10.2 Åのピークがグリセロール処理によって11 Å付近 ($2\theta : 8^\circ$ 付近) へ不完全な膨張をし、300°C加熱処理で7.13 Åに収縮する。また、7.13 Åのピークは550°C加熱処理により完全に消失する。

したがって、本試料では緑泥石 (chlorite)、ハロイサイト (10 Å) (halloysite (10 Å))、イライイト (illite)、カオリン鉱物 (kaolin minerals)、クリストバライト (cristobalite) が検出される。

・粒土組成

僅かに礫と砂が混じるが、90%以上が泥 (シルト・粘土) であり、粘土がシルトよりも多い。

3 宝満山遺跡16次B区16SF008 黄色土 (硬化面)

X線回析線として14.5 Å ($2\theta : 6.1^\circ$)、10.0 Å ($2\theta : 8.8^\circ$)、7.19 Å ($2\theta : 12.3^\circ$)、4.98 Å ($2\theta : 17.8^\circ$)、4.84 Å ($2\theta : 18.3^\circ$)、4.27 Å ($2\theta : 20.8^\circ$)、3.59 · 3.55 Å ($2\theta : 24.8 \cdot 25.1^\circ$)、3.35 Å ($2\theta : 26.6^\circ$) に主要ピークが認められる。各処理では14.5 Åのピークが300°C · 550°C加熱処理で一部10.0 Åに不完全な収縮を示す。また、7.19 Åのピークは550°C加熱処理でほとんど消失する。

したがって、本試料では緑泥石 (chlorite)、イライイト (illite)、カオリン鉱物 (kaolin minerals) が検出される。

・粒土組成

今回の試料の中では礫と砂が最も多く混じるが (20%以上)、それでも70%以上が泥 (シルト・粘土) であり、粘土がシルトよりも多い。

4 宝満山遺跡16次B区16SF008 橙色土（地山面）

X線回折線として14.5 Å ($2\theta : 6.1^\circ$)、10.0 Å ($2\theta : 8.8^\circ$)、7.19 Å ($2\theta : 12.3^\circ$)、4.98 Å ($2\theta : 17.8^\circ$)、4.84 Å ($2\theta : 18.3^\circ$)、4.27 Å ($2\theta : 20.8^\circ$)、3.59 Å ($2\theta : 24.8^\circ$)、3.35 Å ($2\theta : 26.6^\circ$) に主要ピークが認められる。各処理では10.0 Åのピークがグリセロール処理によって11 Å付近 ($2\theta : 8^\circ$ 付近) へ不完全な膨張をし、14.5 Åのピークがカリウム飽和で10 Åに不完全な収縮をする。また、14.5 Åのピークは300℃・550℃加熱処理で消失または7 Å付近への収縮が認められる。7.19 Åのピークは550℃加熱処理ですべて消失する。

したがって、本試料では緑泥石 (chlorite)、イライト (illite)、ハロイサイト (10 Å) (halloysite (10A))、カオリン鉱物 (kaolin minerals) が検出される。

・粒土組成

80%以上がの泥（シルト・粘土）があり、粘土が著しく多い組成を示す。

(4) 考察

いずれの土壤も緑泥石を主体とする粘土鉱物組成であるが、池の口遺跡ではクリストバライトが混在する。

クリストバライトは一般に火山岩や火山砕屑物に見いだされる。また、ガラス質火山灰が海底に堆積し、その後の続成作用によって生成された岩石、例えば第三紀頁岩中には、オパールクリストバライトと呼ばれる低結晶のクリストバライトが認められる。このオパールクリストバライトは堆積物や土壤中にも見いだされ、今回検出されたクリストバライトはおそらく後者と思われる。緑泥石は、変成岩に由来する土壤では、母材に継承する緑泥石が見られる。これら緑泥石は土壤中に変質を受け、層間の水酸化シートが溶出してパーミキュライトあるいはスメクタイトに変化し、その後速やかに消失すると考えられている。一方、酸性・湿潤気候下の土壤では、2八面体型のパーミキュライトやスメクタイトの層間にヒドロキシ-A1が沈積して、部分的に水酸化物シートを形成し、緑泥石化が進行すると考えられている。今回の結果では、いずれも緑泥石として同定したが、各処理のピーク変動から見て緑泥石の風化あるいは緑泥石化がかなり進んだ緑泥石とみることができ、緑泥石・パーミキュライト中間体 (chlorite-vermiculite intergrade) としてみることもできる。この緑泥石・パーミキュライト中間体は土壤中に広く分布し、特に比較的著しい風化によってできた酸性の土壤に多く、また、下層に比較し、表層の土壤に多い傾向があるとされている。今回の試料は、粒土組成に見られるように粘土含量が高く、風化がかなり進んでいる土壤と見られ、その点においても緑泥石・パーミキュライト中間体の可能性が高い。この点を明確にするには今回実施しなかった別の処理が必要であり、今後の課題とされる。その他に検出された鉱物にイライト、ハロイサイト (10 Å)、

カオリン鉱物があるが、イライトは2八面体型雲母粘土鉱物の総称名であり、土壤中に広く見出しされる。この鉱物の先駆的鉱物は白雲母であり、比較的風化しにくい。カオリン鉱物は、カオリナイト、ハロイサイト、デイッカイト、ナクライトを含み、それらを総称する亜族名である。土壤中にはカオリナイトまたはハロイサイト（7Å）の存在が一般的であるが、X線回析で両者を識別するには別の処理が必要であり、ここではカオリン鉱物として同定した。ただし、今回の試料にはハロイサイト（10Å）が検出されていることなどから、今回のカオリン鉱物はハロイサイト（7Å）である可能性が高いと考えられる。このハロイサイトは、花崗岩、安山岩、玄武岩に由来する土壤の主要な粘土鉱物であり、弱い酸性下斜長石の風化によって生成し、長管状を呈する。一方、火山灰起源の土壤では、ケイ酸富化のもと、アロフェンから球状のものが生成し、また、最近では火山灰から直接ハロイサイトが生成されることが報告されている。さらに第三紀堆積岩に由来する古赤色土に、スメクタイト→ハロイサイト/スメクタイト混合層鉱物→ハロイサイトの生成が見られる。今回のハロイサイトがどのような生成経路を辿ったかについては、遺跡の地質学的背景などの情報が必要であるため、詳細は分からない。各試料の粒度組成については、前に述べたようにいずれも泥の割合が多いことから、風化はかなり進んだ土壤であると言える。

引用文献

岩生周一・長沢敬之助・宇田川重和・加藤忠蔵・喜田大三・青柳宏一・渡邊裕（1992）「粘土の事典」.504p.,朝倉書店

久馬一剛・佐久間敏雄・庄子貞雄・鈴木皓・服部勉・三土政則・和田光史（1993）「土壌の事典」.566p.,朝倉書店

日本粘土学会編（1987）「粘土ハンドブック 第二版」.1289p.,技報堂出版

地学団体研究会・地学事典編集委員会（1981）「増補改訂 地学事典」.1612p.,平凡社

和田光史（1966）粘土鉱物の同定および定量法.土肥誌,37,p.9-17.

宮本隆実・鈴木一久・志岐常正（1988）粒度組成.碎屑性堆積物研究会編「堆積物の研究法-礫岩・砂岩・泥岩-」,377p. : p.164-211,地学団体研究会.

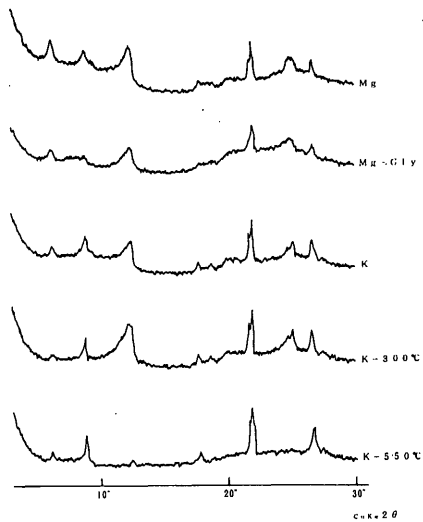


図1 池ノ口遺跡 黒灰色土X線回析チャート

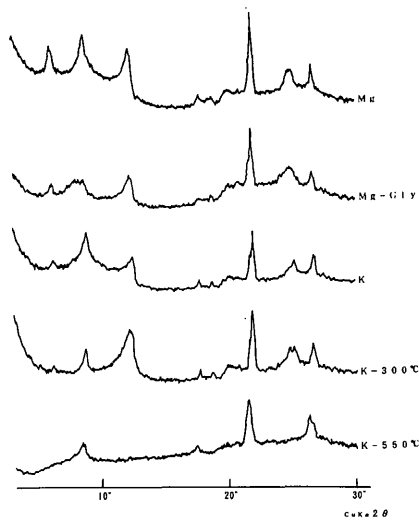


図2 池ノ口遺跡 灰褐色土X線回析チャート

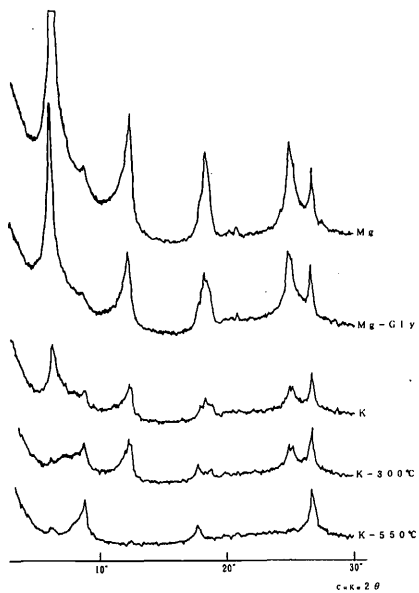


図3 宝満遺跡B区 黄色土X線回析チャート

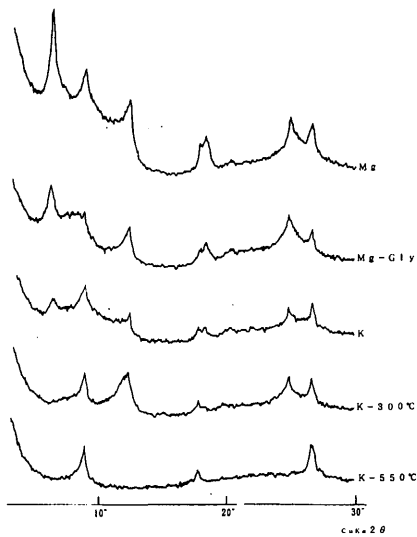


図4 宝満遺跡B区 橙色土X線回析チャート

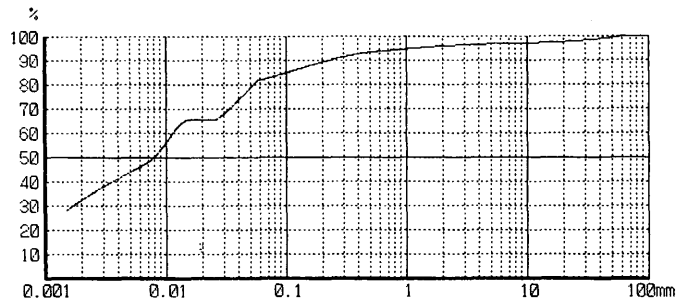


図5 池ノ口遺跡 黒灰色土の粒径加積曲線

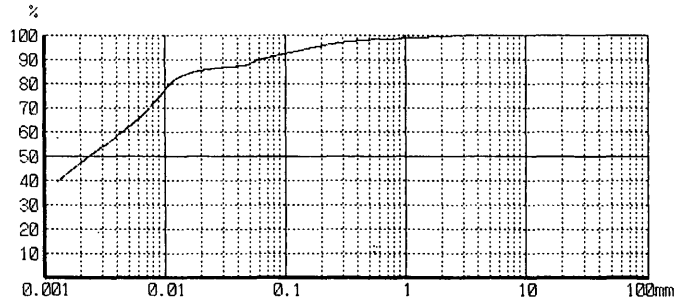


図6 池ノ口遺跡 灰褐色土の粒径加積曲線

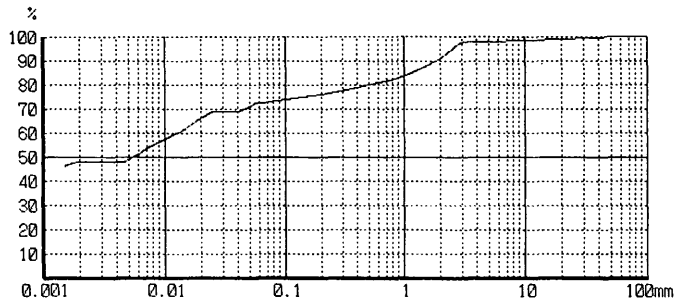


図7 宝満遺跡B区 黄色土の粒径加積曲線

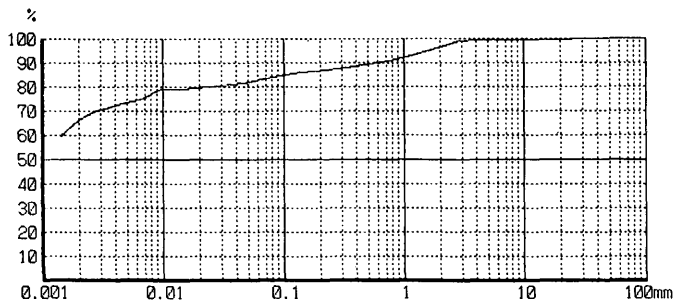


図8 宝満遺跡B区 橙色土の粒径加積曲線

写真図版





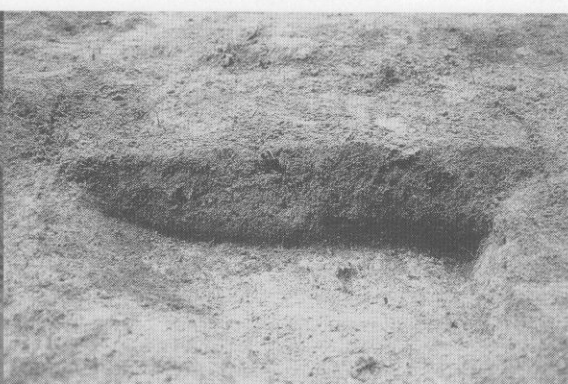
1 14次調査全景（南西より）



2 14次調査全景（北東より）



1 14次調査14SK002



4 14次調査14SK004



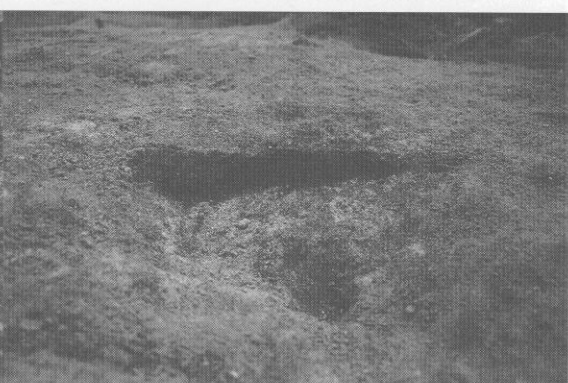
2 14次調査14SK002



5 14次調査14SK004



3 14次調査14SK003



6 14次調査14SK006



1 16次調査全景（東より）



2 16次調査全景



1 16次調査A区全景（西より）表土除去時点

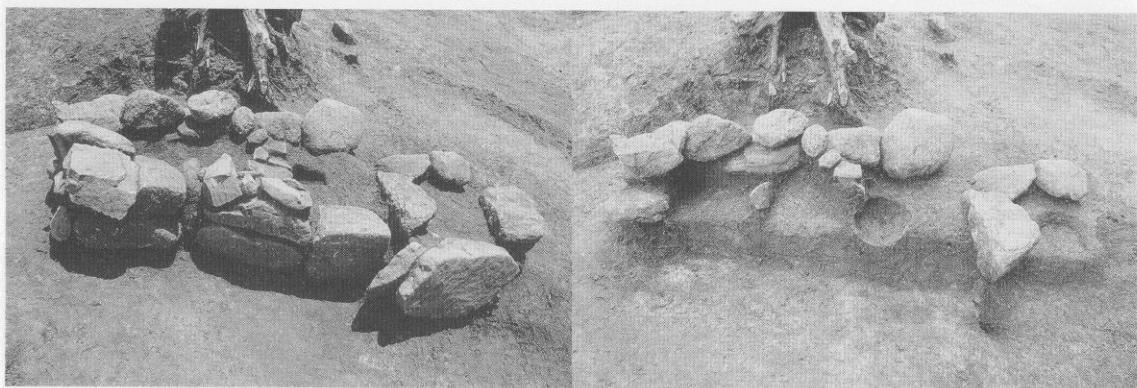


2 16次調査A区全景（西より）淡紅土除去時点



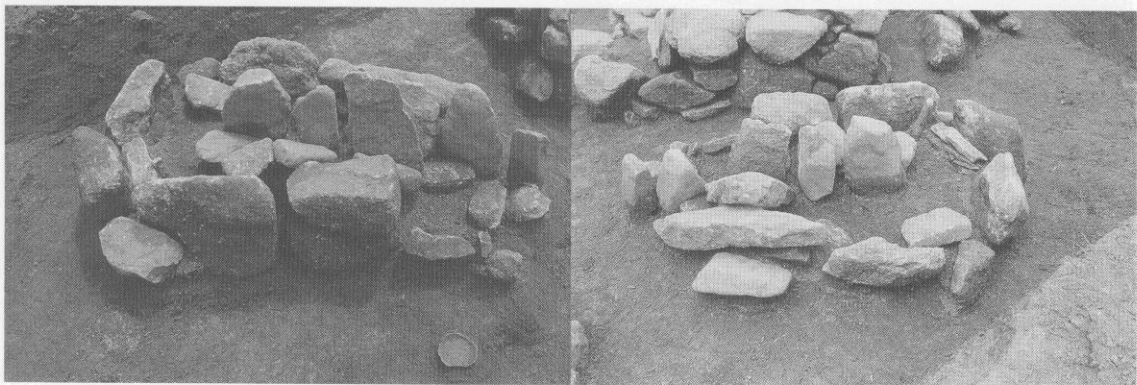
1 16次調査A区16SX010 (南西より)

2 16次調査A区16SX010 (北東より)



3 16次調査A区16SX010 (南西より)

4 16次調査A区16SX010土層



5 16次調査A区16SX011 (南西より)

6 16次調査A区16SX011 (北東より)



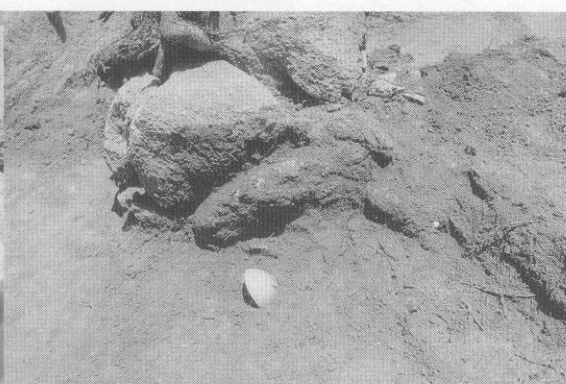
1 16次調査A区16SX015 (北東より)



2 16次調査A区16SX015 (南西より)



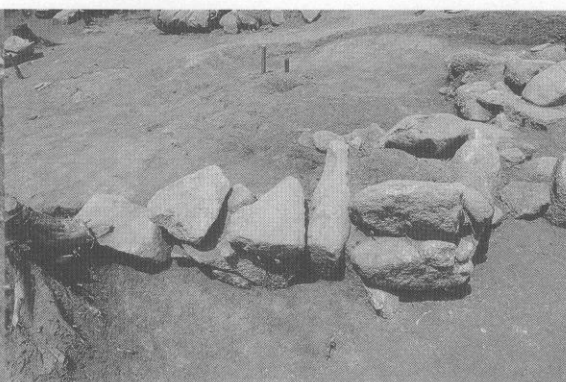
3 16次調査A区16SX015白磁出土状況



4 16次調査A区16SX015青磁出土状況



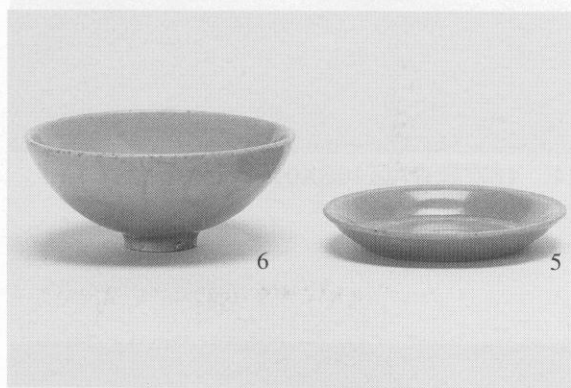
5 16次調査A区16SX016 (東より)



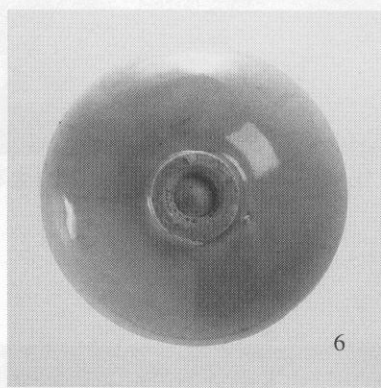
6 16次調査A区16SX017 (北東より)



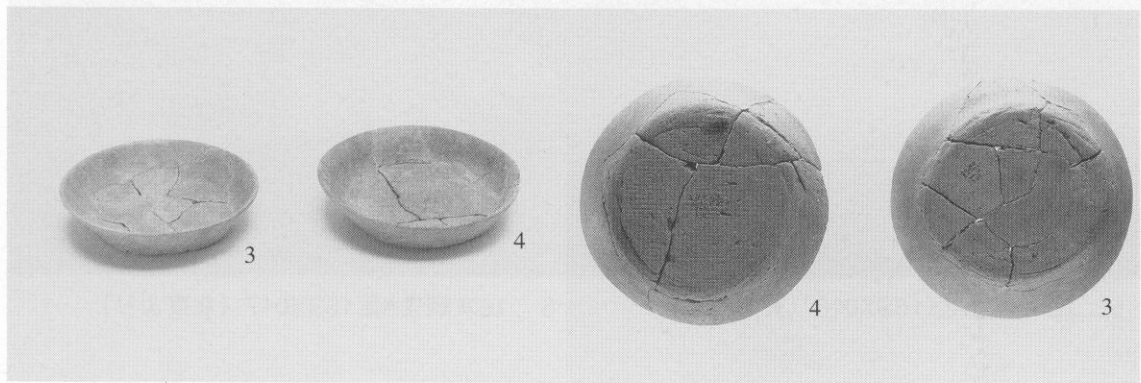
1 16次調査A区16SX015出土遺物



2 16次調査A区16SX015出土遺物

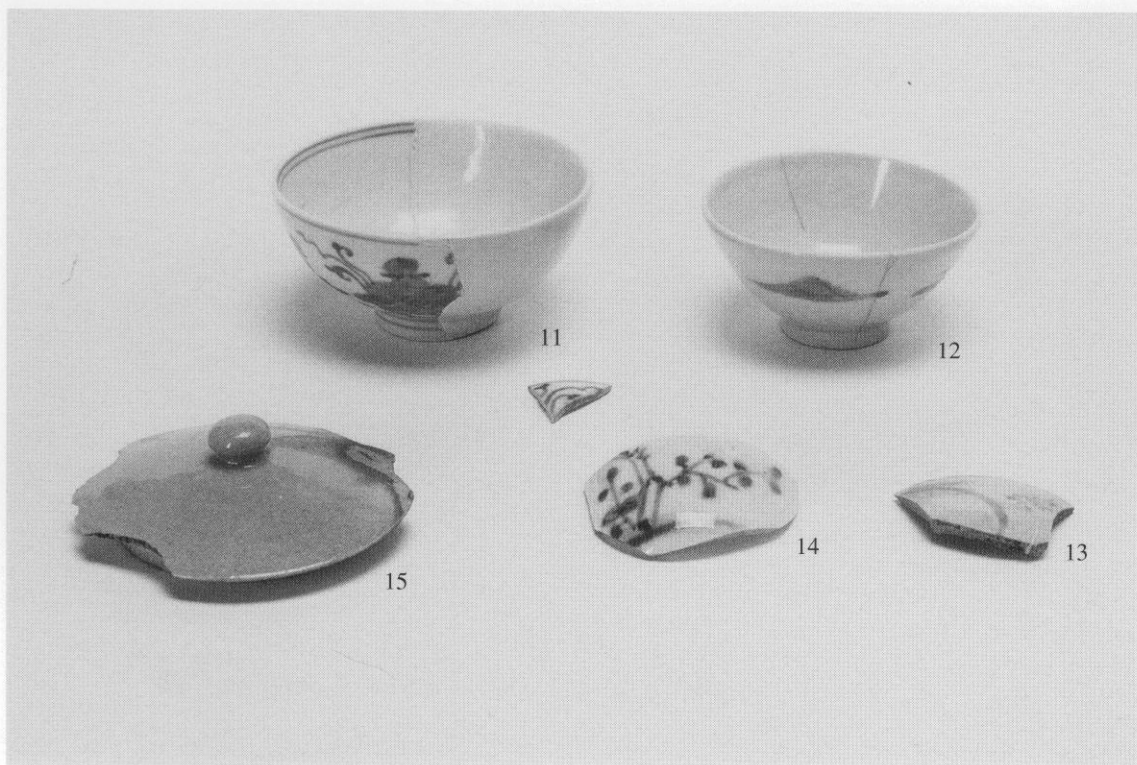


3 同左青磁小碗裏



4 16次調査A区16SX015淡紅土出土遺物

5 同左土師器坏裏



1 16次調査A区表土出土遺物

16次調査A区表土出土遺物



2 16次調査A区各層出土遺物

16次調査A区各層出土遺物



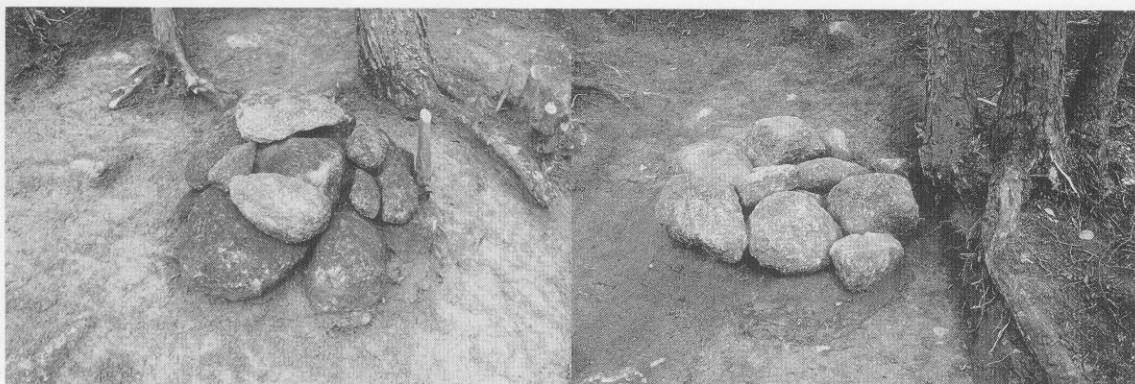
1 16次調査A区16SX010・011出土遺物

新羅土出土品 16SX010・011



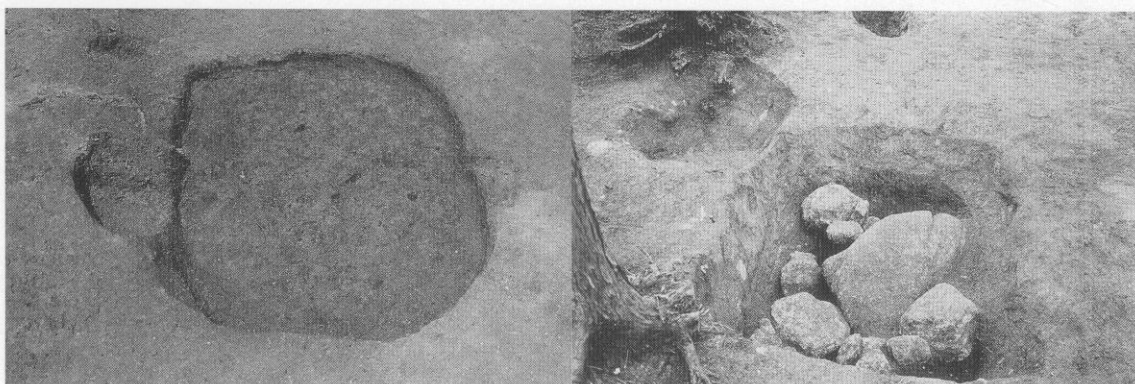
2 16次調査A区16SX016出土遺物

新羅土出土品 16SX016



1 16次調査B区16SK001

4 16次調査B区16SK004



2 16次調査B区16SK002

5 16次調査B区16SK006

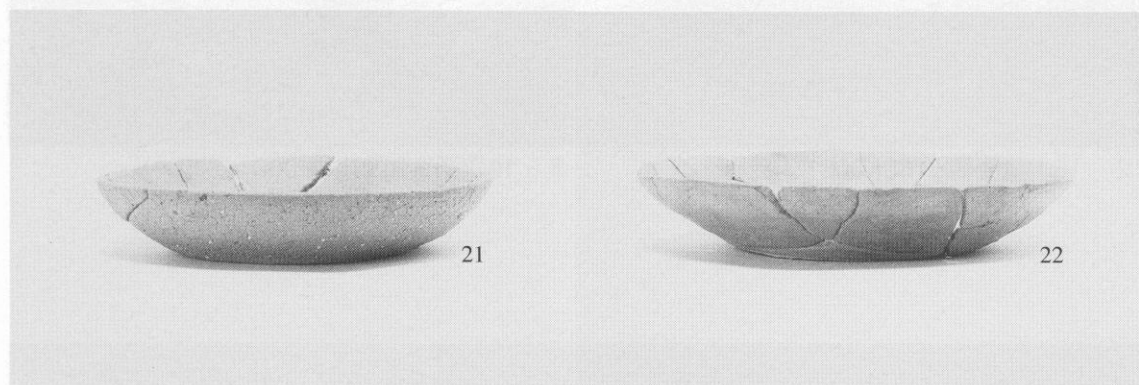


3 16次調査B区16SK003

6 16次調査B区16SK007

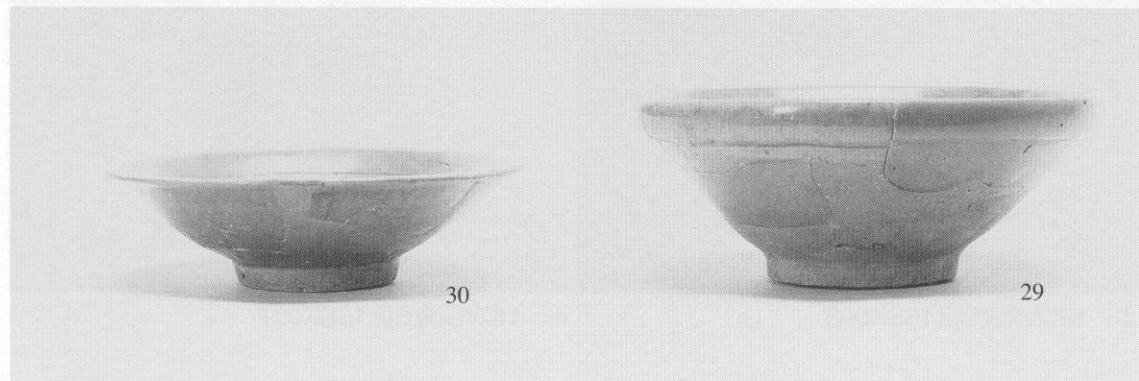


1 16次調査B区出土遺物



2 16次調査C区16SX020出土遺物

3 16次調査C区16SX020出土遺物

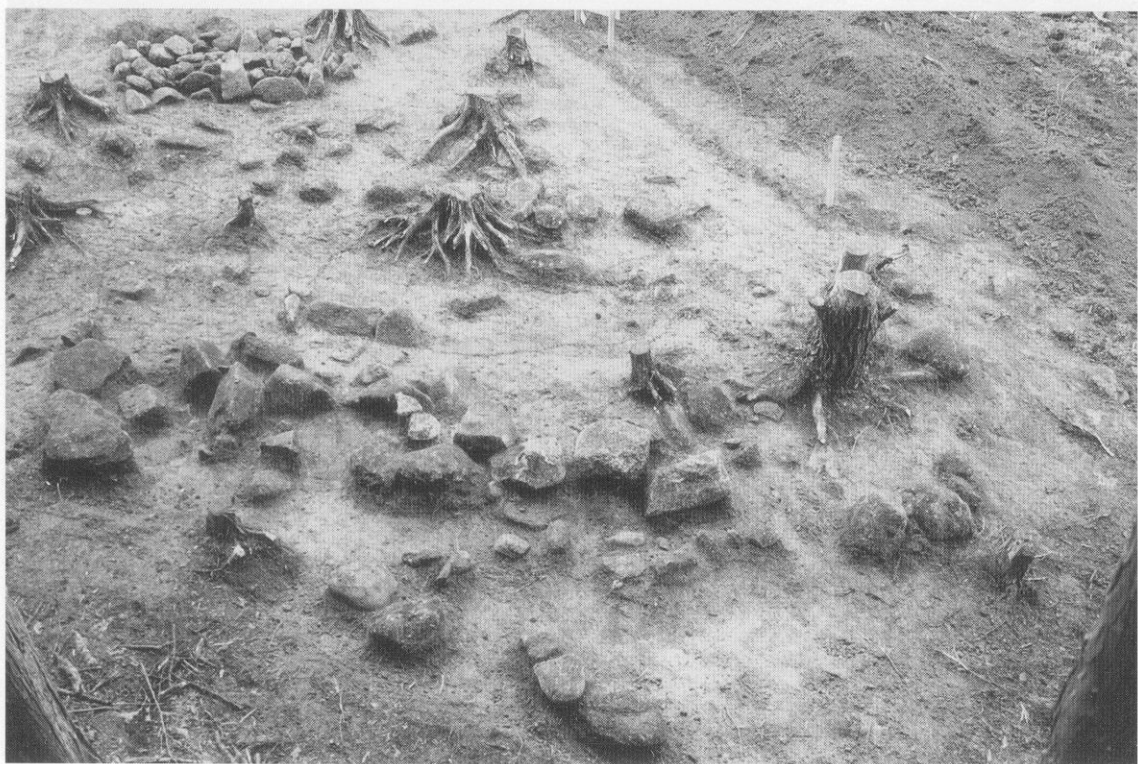


4 16次調査C区16SX020明黄褐出土遺物

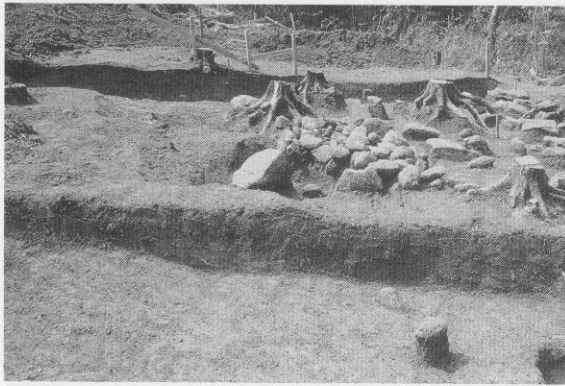
5 16次調査C区16SX020明黄褐出土遺物



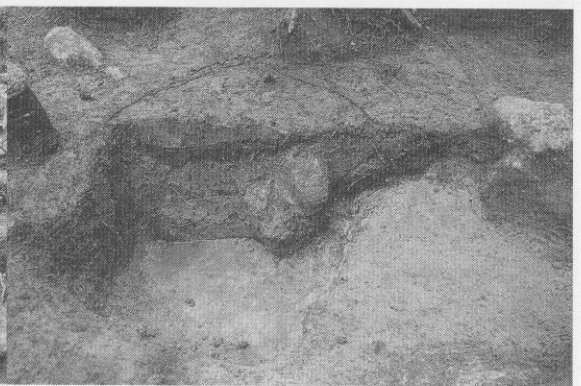
1 16次調査C区全景



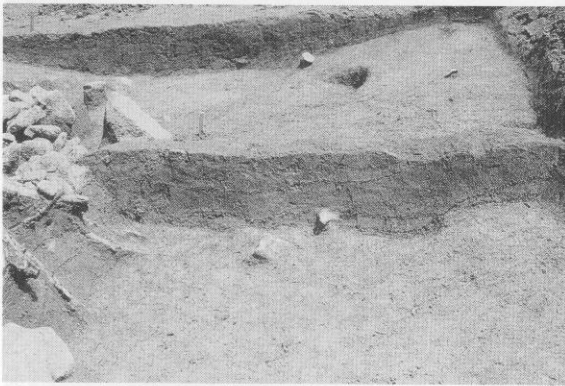
2 16次調査C区全景 (南西より)



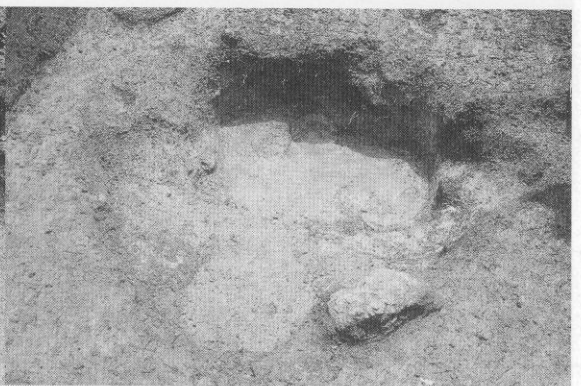
1 16次調査C区土層（北より）



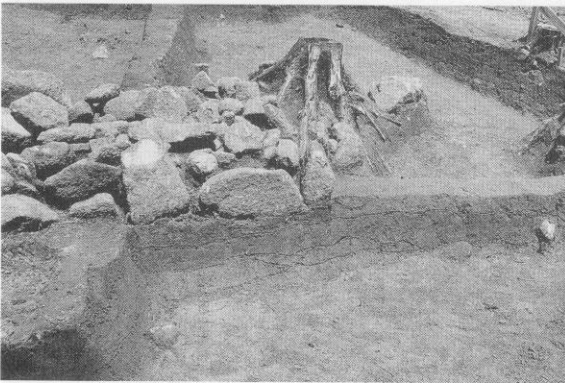
4 16次調査C区16SK021（北より）



2 16次調査C区土層（南より）



5 16次調査C区16SK021（西より）



3 16次調査C区土層（西より）



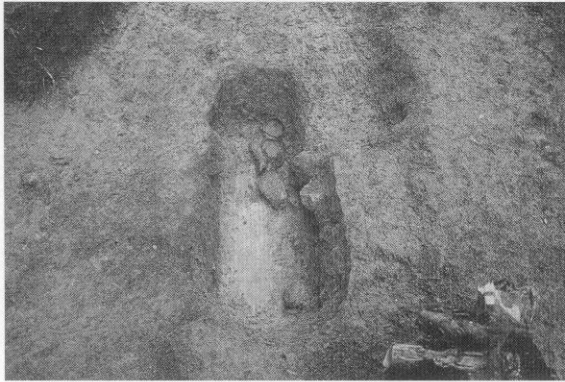
6 16次調査C区16SK024（西より）



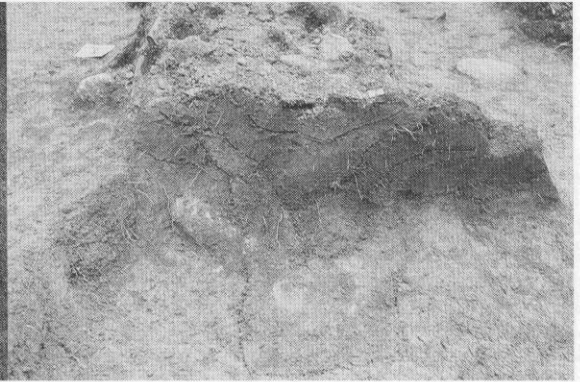
1 16次調査C区16SX020 (西より)



2 16次調査C区16SX020 (西より)



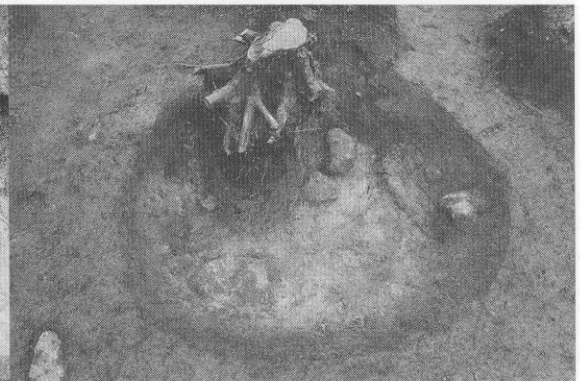
3 16次調査C区16SX020 (南より)



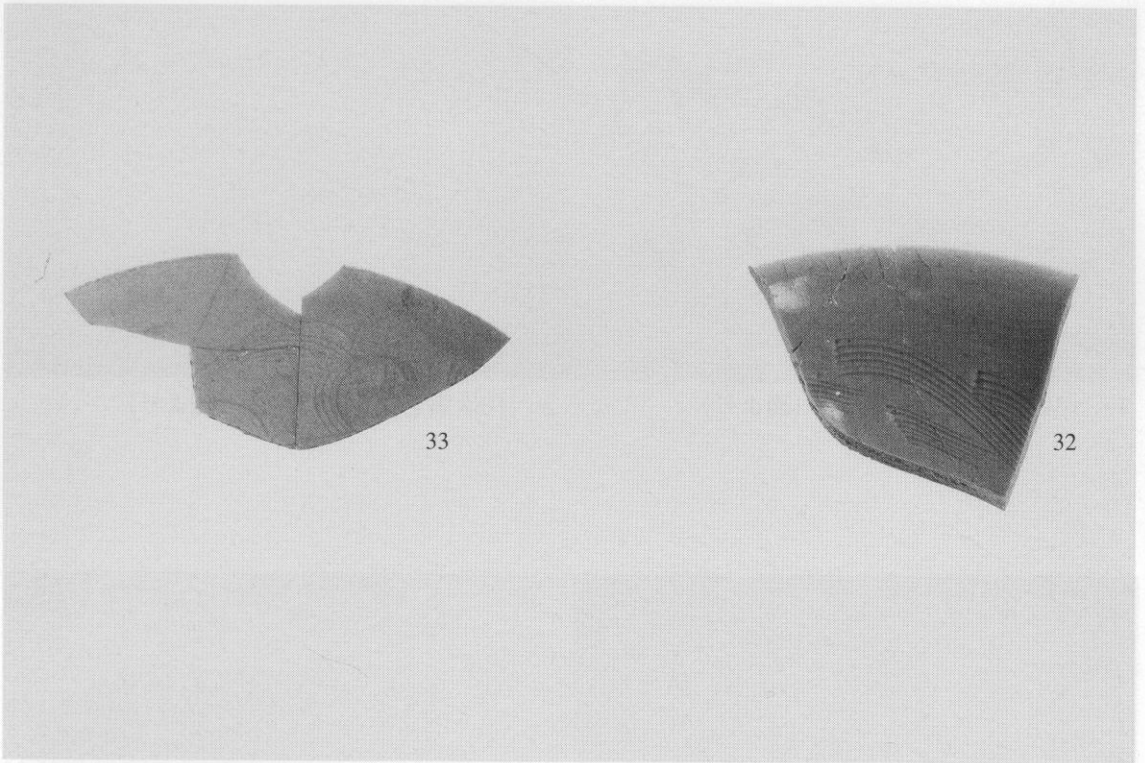
4 16次調査C区16SX020土層 (北より)



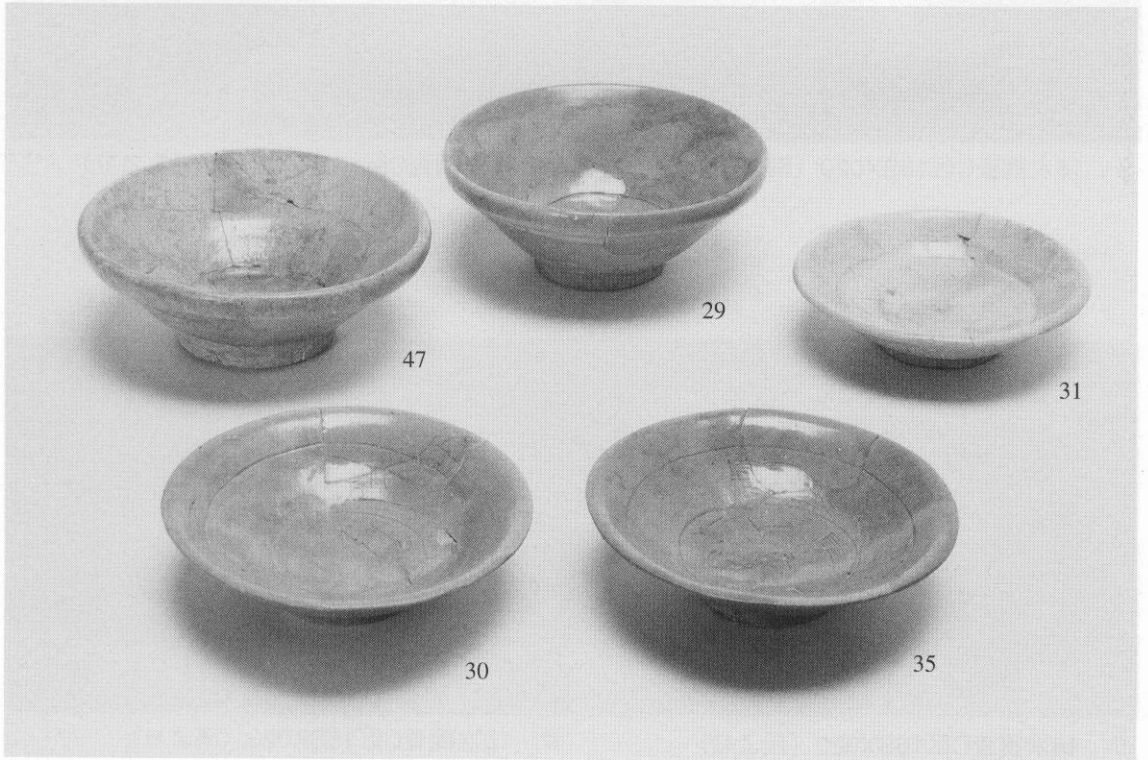
5 16次調査C区16SX020 (西より)



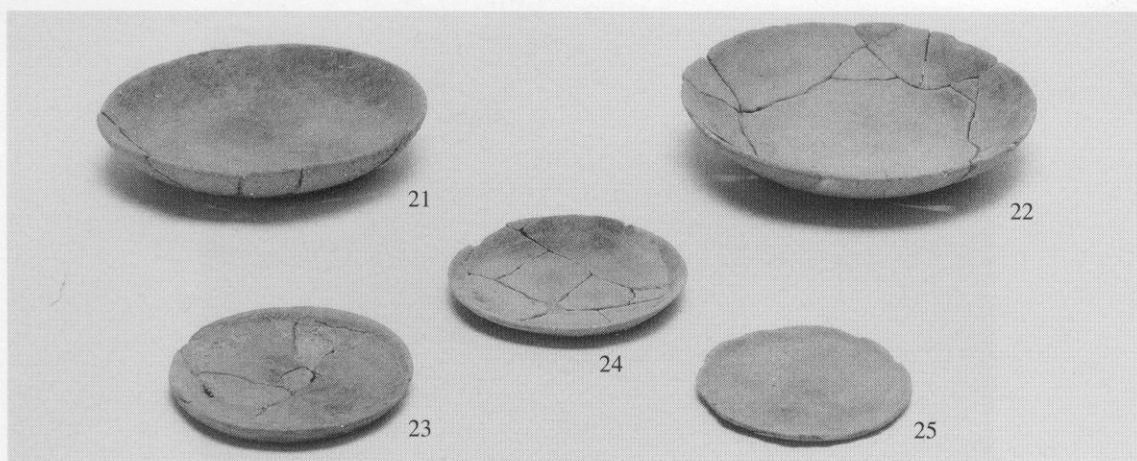
6 16次調査C区16SK023 (南より)



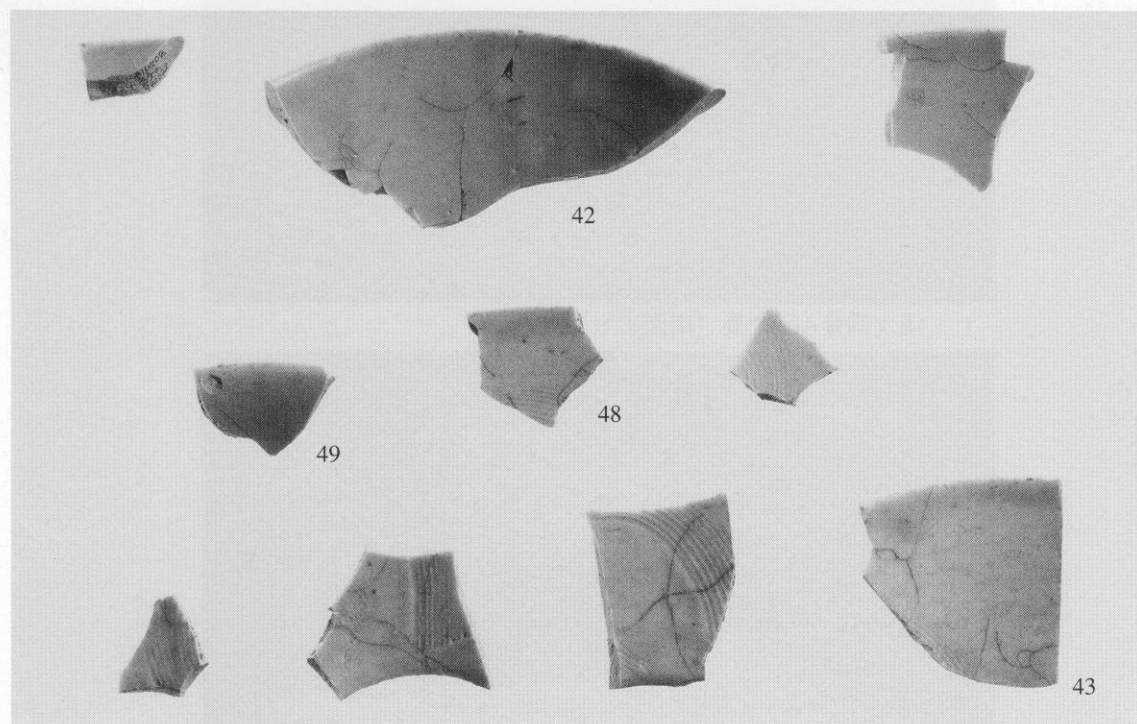
1 16次調査C区16SK023出土遺物



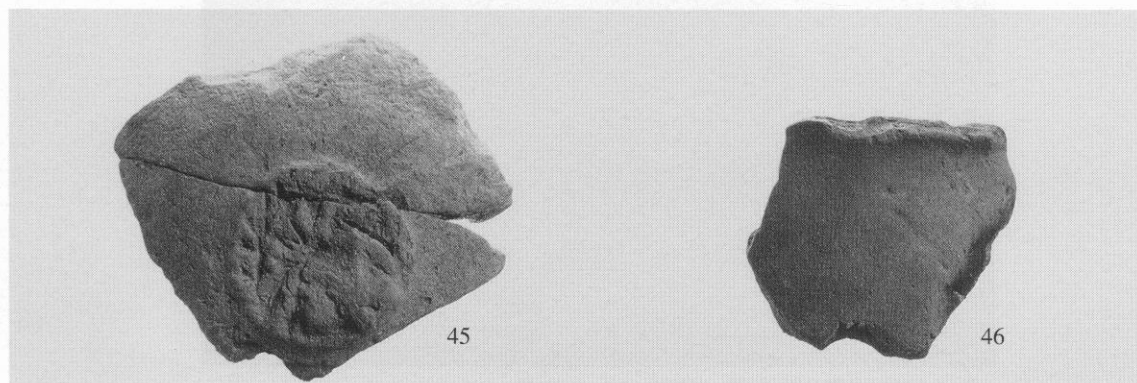
2 16次調査C区出土白磁



1 16次調査C区16SX020出土遺物



2 16次調査C区黄灰土出土白磁



3 16次調査C区黄灰土・淡黄灰土出土遺物



1 18次調査A区全景（南西より）



2 18次調査B区全景（南より）



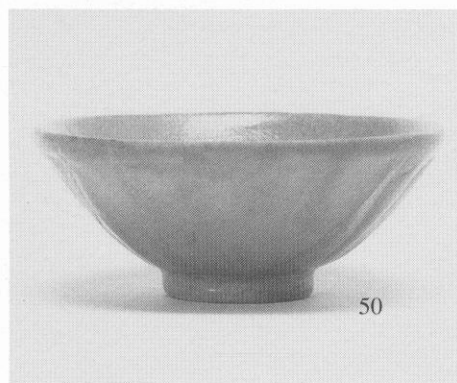
1 18次調査A区18SK007・006 (南より)



2 18次調査A区18SK008 (南より)



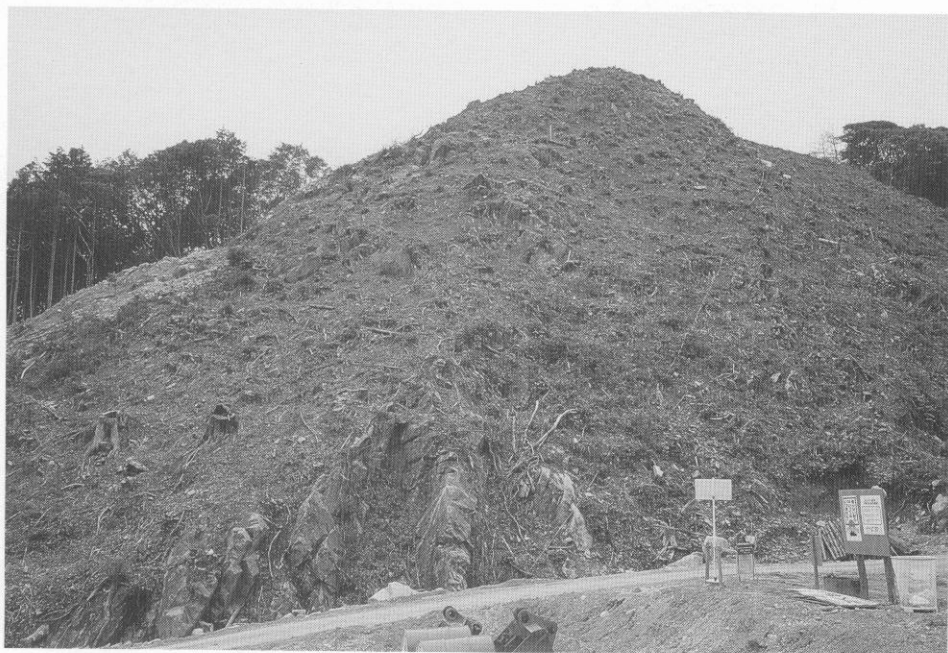
1 18次調査A区18SK008 (東より)



2 18次調査A区表土出土青磁



1 18次調査B区南斜面アプライト露頭



2 18次調査B区南斜面アプライト露頭（南より）

宝満山遺跡群Ⅱ

宝満14・16・18次調査

平成9年3月17日

発行 太宰府市教育委員会

太宰府市観世音寺1-1-1

印刷 大道印刷株式会社

春日市日の出町6-23